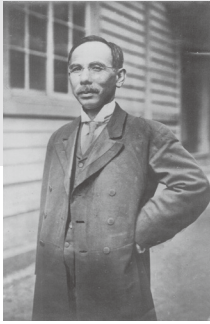


成瀬記念館

2020

No.35

日本女子大学成瀬記念館



成瀬仁蔵

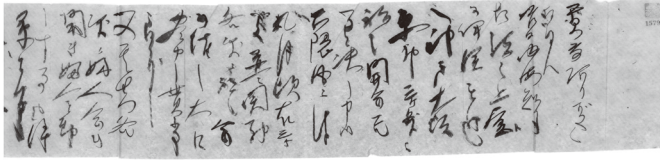
没後 100 年記念

成瀬仁蔵書簡展

前期 9/20(金)~10/20(日)

後期 11/5(火)~12/20(金)

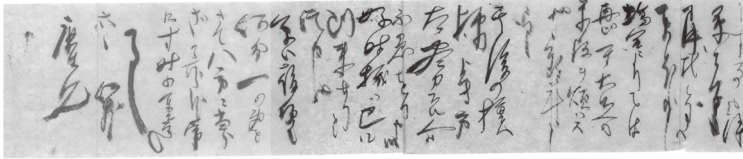
本学創立者 成瀬仁蔵は 1919 (大正 8) 年に亡くなった。2019 年は成瀬没後 100 年にあたることから、その記念として「成瀬仁蔵書簡展」を開催。成瀬が発信した書簡約 360 通の中から、麻生正蔵と妻マスエに宛てた書簡を中心に 42 通の書簡を紹介した。



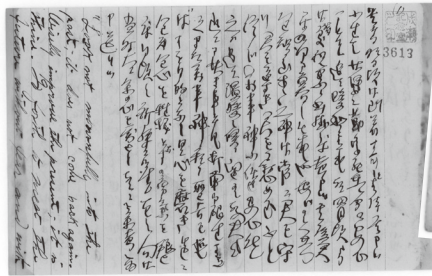
1899 (明治 32) 年 6 月 6 日 麻生正蔵宛成瀬仁蔵書簡



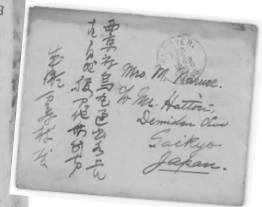
麻生正蔵



成瀬マスエ



1892 (明治 25) 年 2 月 21 日 成瀬マスエ宛成瀬仁蔵書簡



1891 (明治 24) 年 1 月 11 日 成瀬マスエ宛成瀬仁蔵書簡



「三綱領」の記された日

「三綱領」（「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」）は成瀬が最後の病床で記したもののだが、書かれた日にちについてはこれまで不明とされてきた。没後100年にあたる2019年の調査で、成瀬の秘書的役割を果たしていた仁科節（国文学部5回生）の日誌から、2月12日に揮毫されたものだということが判明した。

大正十三年
二月六日
共同奉仕

大正十三年
二月六日
自発創生

大正十三年
二月六日
信念徹底

二月六日
○ 成瀬先生
○ 山本先生
○ 仁科先生
○ 波島先生
○ 南先生
○ 伊藤先生
○ 新井先生
○ 大田先生
○ 五木先生
○ 新井先生
○ 健吉先生
○ 堀野先生
○ 色川先生

二月七日
○ 三四生一人
○ 山本先生
○ 仁科先生
○ 波島先生
○ 南先生
○ 伊藤先生
○ 新井先生
○ 大田先生
○ 五木先生
○ 新井先生
○ 健吉先生
○ 堀野先生
○ 色川先生

二月八日
○ 三四生一人
○ 山本先生
○ 仁科先生
○ 波島先生
○ 南先生
○ 伊藤先生
○ 新井先生
○ 大田先生
○ 五木先生
○ 新井先生
○ 健吉先生
○ 堀野先生
○ 色川先生

二月十二日
麻生氏へ
信念徹底、自発創生、共同奉仕
奮闘努力達成理想
（おめでとう）

二月十三日
福島四郎氏へ
生誕四周年
北仁術先生へ
（おめでとう）

二月十四日
福島氏へ
（おめでとう）

二月十七日
大村先生へ
信念徹底、自発創生、共同奉仕
奮闘努力達成理想
（おめでとう）

二月十九日
二木先生へ
天心自心中心、自発創生、信念徹底、共同奉仕
奮闘努力達成理想
（おめでとう）

二月廿一日
三井先生へ
信念徹底、自発創生、共同奉仕
奮闘努力達成理想
（おめでとう）



成瀬記念館 2020

No.35

目次

表紙 / カット・武藤良子

	口絵		
	没後100年記念 成瀬仁蔵書簡展		
	「三綱領」の記された日		
	巻頭言		
	成瀬記念館	篠原 聡子	4
	随想		
	上代タノが新渡戸稲造から受け継いだもの	長本 裕子	6
	「成瀬仁蔵とその時代研究会」の活動について	長野 和子	9
	目白キャンパスの図書館移転作業について	中曽根 緑	11
	展示と資料		
	日本女子大学の卒業論文		
	―学びの集大成からみる学園史―	大門 泰子	15
	未発表資料紹介		
	上代たの宛川端康成書簡		40
	成瀬記念館蔵		
	上代たの宛川端康成書簡について	深澤 晴美	44
	パール・バック ノーベル平和賞推薦に関して		
	交わされた書簡、そこから見えてくるもの		
	―上代たのの考える真の平和運動とは―	大橋有希子	50
	未発表資料紹介		
	開書き資料に見る学生生活	杉崎 友美	64
	未発表資料42 成瀬仁蔵講話	1・2	
	大学部 計画発表会にて	―大正三年九月十六日―	72
	大学部第二、三学年にて	―大正三年九月二十三日―	75
	二〇一九年度展示の記録（成瀬記念館／西生田記念室）		81
	二〇一九年度活動の記録		84

成瀬記念館

日本女子大学学長
成瀬記念館館長

篠原 聡子

創立八〇周年の記念事業として建設された成瀬記念館は、正門のすぐ脇に、そして文京区の文化財でもある成瀬記念講堂の向いに建っています。そして、それに隣接して創立者成瀬仁蔵の居宅であった成瀬記念館分館があり、この三つの建物は、この大学の歴史をそれぞれに象徴しています。しかし、それぞれが全く違った様式で建っています。成瀬記念講堂は、木骨トラス構造を用いた明治時代の斬新な洋風講堂建築であり、西洋教会堂の基本形式ラテン十字型の平面をもち、ステンドグラスを用いたゴシック風の大きな窓が印象的な建築物です。成瀬記念館分館は明治の都市的な住宅で、現在では大変重要な遺構と言えるでしょう。そして成瀬記念館は、ロマネスクを模した洋館のような佇まいです。

成瀬記念館の設計者、浦辺鎮太郎は、倉敷に多くの作品を残した建築家で、倉敷にあった多くのレングの洋館からなる伝統的な街並みと調和する近代建築の在り方を追求した建築家でした。歴史的な様式の否定から出発した近代建築とは一線を画するスタンスであったと言えるでしょう。浦部は、それ以前にこの場所にあった建築（附属豊明小学校・幼稚園の校舎として建設され、のちに国文学部の建物となったが、戦後は一号館と呼ばれていた）のあり様を詳細に調べ、現在のホールの意匠などにその一部を再現していますが、成瀬記念館の建築にあるのは単なる斬新さでも、伝統の継承でもあり

ません。この建築が語りかけてくるのは、成瀬記念館が単にアーカイブの所蔵、展示の場所ではなく、伝統を踏まえながらも常にそれを更新していこうとする姿勢であるように思います。

その意味では、成瀬記念館は過去と未来の結節点にある場所なのです。成瀬記念館には、日本女子大学の創立者成瀬仁蔵と本学園にかかわる歴史的な資料が保存、展示されていますが、こうした博物館があることは、日本女子大学および附属校園が長い歴史をもち、しかも創立者の思いやその伝統を大切に後世に伝えていこうという、本学にかかわる人々の思いが引き継がれてきたからにほかなりません。私たちは、しばしばここに立ち寄り、こうした先人たちの思いを引き継ぎ、原点を振り返り、そして未来を見つめる時間を持つことを忘れてはならないのだと思います。

二〇二〇年七月

上代タノが新渡戸稲造から受け継いだもの

長本 裕子

上代タノを知ったのは、旧図書館の五階にあった大学院生用図書室で「上代タノ平和文庫」を見たときだった。私は、地方の大学を卒業して日本女子大学大学院（修士課程）日本文学専攻に入学した。どういう人だろうと思いつつも、一冊の本を手を取ったわけでもなかった。それから四〇年余の時間が流れ、上代について書くことになるとは、不思議なめぐり合わせである。

大学院を修了して、都内の私立女子中学・高等学校の国語科教員となった。その学校の初代校長が新渡戸稲造であった。旧五千円札に登場すると、新渡戸の文章を選び生徒用のテキストを作ることになり、教員

が手分けして文意の解説や現代での活用方法などを書いた『新渡戸稲造全集』（教文館）の表紙をめくると、監修者の中に「上代たの」の名前があった。上代は、第十巻の解説と、別巻一の『新渡戸博士追憶集』に「新渡戸先生」を書いていた。

上代は、暁星寮の寮監 E・G・フィリップスから新渡戸を紹介された。初めて新渡戸邸を訪れたとき、書齋にぎつしり並ぶ英・独・仏の書籍に圧倒され、向学心を刺激された。さらに虫干しを手伝ったとき、ほとんどの本に赤や青の鉛筆で太く線が引いてあったことに驚嘆した。新渡戸は、文章がいいと思うと赤線、思想がいいと思うと青線を引いた。次に読むときは赤線・青線をたどっていけばいいという新渡戸の読書法であった。上代は、新渡戸からスピードと要点を把握する読書法を教わったというが、これもその一つだった

のであろう。そして新渡戸は、「食いたいのものも食わないで買い集めたものだよ」という蔵書を、自分を慕って訪れてくる学生に自由に閲覧させ、惜しみなく与えた。上代もカーライルなど多くの本をもらった。愛書の心を植え付けられたという。

やがて、新渡戸からアメリカのウエルズ女子大学へ留学を勧められる。出発に際してメアリー夫人が洋服の準備など我が娘のように世話をやいている。さらに、博士の学位を取るためにミシガン大学へ二度目の留学を勧められた。極めつけは、新渡戸の国際連盟事務次長最後の年の約半年間、ジュネーヴの新渡戸邸に滞在したことである。その間、国際連盟の総会を毎日傍聴し、各国を代表して送られてきた女性たちがいきいきと活躍する姿を見た。レマン湖のほとりの新渡戸邸は、さながら国際交流の場と化していた。上代は、



右:ジュネーヴからの帰国の船上で目隠しをして戯れる新渡戸。
後ろは上代と思われる／上:左から新渡戸、琴子親子、一人お
いて上代



日々訪れる日本人や世界各国の政治家、リーダーたちと言葉を交わし、ジュネーヴ大学での新渡戸の感銘深い講演を聴き、帰国の船旅も新渡戸夫妻や養女の琴子親子に同行した。新渡戸が客死することになるカナダへ出発する前日、朝食をともにし、ジャンヌ・ダルクの写真やダント、ホイットニアの本などをもらっている。

これほどまでに新渡戸と交流があった上代について、是非とも書きたいと思い、手にしたのが『上代タノ——女子高等教育 平和運動のバイオニア』（島

田法子・中島邦・杉森長子共著）だった。この本で新渡戸夫妻からの手紙が多く成瀬記念館に所蔵されていることを知り、コピーをしていた。そして昨年九月、盛岡市にある新渡戸基金の年刊誌『新渡戸稲造の世界』二八号に、資料紹介として「新渡戸稲造の女性リーダー育成術——上代タノへの手紙を通して（前編）」を投稿した。

上代が新渡戸から受け継いだ最大のもものは「平和運動の行動力」だと思ふ。日本における最初の女性平和団体「婦人平和協会」で上代はめざましい活躍をしている。一九二六年七月、二度目の留学でケンブリッジにいた上代が、ダブリンで開かれた WILPF（婦人国際平和自由連盟）第五回国際総会で、初めて正式に日本支部代表として支部報告を行った。そして、一九五一年五月から一九五六年まで、日本婦人平和協

会（婦人平和協会を改称）の会長を務め、会員の倍増と育成のため普及宣伝部の新設、企画部の設置、原水爆禁止の署名運動など次々と実行した。この「婦人平和協会」の設立は、恩師成瀬仁蔵の悲願であった。

上代は、新渡戸の手紙や国際連盟での働きを通して、世界平和を願って、寝食を忘れて取り組む崇高な精神を感じ取った。帰国後上代は、日本女子大学の学生全体で国際連盟協会学生支部を作り、一九二七年五月、同校で発会式を行った。国際連盟協会展長洪沢栄一の挨拶の後、新渡戸は、やさしい口調でユーモアを交え「国際連盟の精神」について講演（『家庭週報』八九〇～八九二号に掲載）した。新渡戸が最も強調したのは、「戦争の第一線に立つものは赤子、第二戦に立つものは婦人である。戦争防止のために、女子として相当の尽力を願いたい。」という主

旨であった。それを上代は真つ直ぐに受け継いだのである。WILPF日本支部の事務局が、現在も日本女子大学内に置かれている所以である。

こうした上代の平和運動の根底に「神の前ではすべての人が平等であり、暴力が存在してはいけない、世界平和のために祈り、行動する。」というクエーカーの信条があった。上代は若き日、聖バルナバ教会で洗礼を受けたが、一九五〇年の復活祭でクエーカー教徒となった。新渡戸夫妻も、WILPFの初代会長で上代が尊敬するジェーン・アダムズもクエーカーであった。ジュネーヴ滞在中、上代は、日曜日のクエーカーの集会に出席し、新渡戸やジェーン・アダムズの黙想し神の声を聴く姿に、彼らの平和活動を支える心と力を知った。

上代は、日本女子大学学長時代、

学生が自由に本を手に取りれる開架式図書館（旧図書館）を建設した。そして故郷の高等学校や日本女子大学図書館に多くの書物を寄贈している。学生を愛し、国際人を育てる使命感とともに、愛書の心を新渡戸から受け継ぎ、次代へバトンタッチしたのである。

私は昨年十月、新図書館の四階に「上代タノ平和文庫」を見つけた。数十年ぶりに懐かしい人に再会したような気がした。新渡戸が上代に贈った『東西相触れて』には、新渡戸稲造の献辞と葉書が添付されていた。それを手に取り、しばし上代と新渡戸の交流に思いを馳せた。

（大学院文学研究科日本文学専攻
一九七六年修了／

元新渡戸文化中学高等学校校長

ながもと ゆうこ

「成瀬仁蔵とその時代研究会」の活動について

長野和子

「成瀬仁蔵とその時代研究会」(略称「ナルトキ研」)は、二〇一二年六月九日に発足しました。二〇〇〇年から日本女子大学人間社会学部教授を務められ、その春にご退職されたばかりの片桐芳雄先生(現日本女子大学名誉教授、愛知教育大学名誉教授)のご発案で発足した研究会です。いうまでもなく成瀬仁蔵は日本女子大学の創設者ですが、ご主宰の片桐先生が、ご在任中から精力的に成瀬仁蔵研究を続けておられることはよく知られるところです。先生が命名された「成瀬仁蔵とその時代研究会」という名称には、桜楓会(日本女子大学同窓会)の八〇年以上の伝統を誇る「成瀬仁蔵研究会」と区別

するためと、「できればもう少し成瀬仁蔵を広い視野から研究したい」というお気持ちが進められていると伺っています。

先生が成瀬仁蔵の教育思想に関心を持つ学内外の研究者や学生、日本女子大学の卒業生等呼びかけられた結果、第一回ナルトキ研には一三名が参集しました。まず片桐先生から成瀬研究の課題として、思想、宗教、教育、女性観、自然観などが提示され、その後研究会のあり方について議論が交わされました。参加者と成瀬の関わりはさまざまでしたが、「成瀬が百年以上前にたどり着いた教育思想や問題関心は現在にながるもの」「成瀬の思想の再構築は有意義、成瀬の教育思想を今に生かすことが重要ではないか」「より広い視野から成瀬の現代的世界的意義を探りたい」等の意見ができました。ナルトキ研は不定期に開催され、

発表者一名が四〇分から六〇分の報告を行い、その後一時間程度質疑応答の時間をとるというスタイルを取っています。現在まで二七回開催され、毎回一五名前後の参加者を数えます。発表の概要は「ナルトキ研報告」としてまとめられます。

発表で取り上げられるテーマは、発表者の研究分野によって多岐にわたります。従ってすべての発表の内容をここで紹介することは難しいのですが、カバーされた分野を敢えて分類すると、まず成瀬の宗教観、宗教教育、女性観、大学観、女子高等教育論というジャンルがあげられます。これは成瀬研究の骨格をなすものといえるでしょう。成瀬の教育思想が具現化されたものとして卒業生、桜楓会(同窓会)の活動も一つのジャンルとして挙げられます。ここでは著名な卒業生だけでなく、数多くの一般的な卒業生にも焦点があ

てられています。桜楓会が社会福祉活動に力をいれていたことも取り上げられています。このような成瀬や卒業生に関するジャンルに加え、成瀬の教育思想、女性観に大きな影響を与えた一九世紀アメリカの女性論、社会論に関するジャンルもあります。成瀬のアメリカ留学時期と重なる上記の議論は、成瀬の教育思想の構築過程を知る上で欠かせないものです。さらにその後の日本女子大学の動向や今日的課題を論じた回もあります。このように、毎回様々な視点から発表が行われることが、この研究会の大きな魅力の一つであると思います。

そして一参加者としては、ナルトキ研にまた別の大きな魅力を感じます。それは報告後の質疑応答です。まず片桐先生が発表についての所感を述べられ、質疑応答の口火が切られます。その後参加者からの発言と

なるのですが、先生のユーモアあふれる語り口と巧みなリードに誘発？され参加者の発言が相次ぎます。少人数でもあり、和気あいあいとした雰囲気ではありますが、熱のこもった議論となります。そして研究者、学生、卒業生などさまざまな立場の参加者による議論は議論を呼び、それぞれが発言は連結し時には飛躍し、その結果新たな発想に至ることも度々です。参加者として毎回「目から鱗が落ちる」を実感している、といっても過言ではありません。

成瀬仁蔵が日本女子大学校を創立してからもうすぐ一二〇年になります。当時と比べ女性をとりまく環境は劇的に変化し、女性の活躍の場は大きく広がっています。しかし日本における女性の活躍度は、世界の中で一二二位という報道もあります〔二〇一九年世界ジェンダーギャップ指数〕WEF・世界経済フォーラム。女性

が「人として」力を発揮することを妨げる事象が日本の社会には未だに数多くあり、克服しなければならぬ課題がまだまだ存在しているという事でしょう。女性に内在する力を信じ、社会における女性の役割を探索し続けた成瀬仁蔵の教育思想には、現代に通じるものがあるのではないのでしょうか。一二〇年後の今、成瀬仁蔵を多角的に研究することには大きな意味があると考えます。

「成瀬仁蔵とその時代研究会」略称「ナルトキ研」は、発足から八年を迎えました。これからも「ナルトキ研」では、幅広い分野からの発表と、時に予定時間を大幅にオーバーしての熱い議論が続くことと思えます。

（日本女子大学学術研究員／
「成瀬仁蔵とその時代研究会」
事務局 ながの かずこ）

目白キャンパスの
図書館移転作業について

中曽根 緑

大学創立一二〇周年事業の一つとして、二〇一九年四月三日(水)、目白キャンパスに新図書館がオープンした。二〇一九年二月～三月に実施した旧図書館(以下「旧館」)から新図書館(以下「新館」)への移転作業について準備段階も含め概要を報告する。旧館と新館の施設概要は表1のとおりである。旧館は多くの教室・研究室がある目白キャンパス泉山地区中央に位置し、新館は同キャンパス正門向かい側の目白通りを挟んだ場所に建つということで、キャンパス内とは言え公道を渡る移転となる。

移転対象となる蔵書数は約六六万

冊であり、その一冊一冊が最終的に適切な場所に置かれなければならない。図書館移転計画の焦点は蔵書配架に関する計画ということになる。

その考察をいつから開始したかと言え、二〇一五年初めから始まった新館設計打合せの段階からと言えよう。建物の形状、階数、階ごとの面積といった建物の骨格が書架配置計画、すなわち蔵書配架計画に大きな影響があるからである。新館には面積、収容冊数、閲覧座席数の条件が示されており、必要な閲覧席を設置し、収容冊数の条件を満たすには大規模な集密書架(以下「集密」)の導入が不可避であった。設計趣旨のもと二〇一六年頃に新館の建物概要が固まり、蔵書配架計画の大筋を決めることになる。新館では、棚板総延長全体に占める固定書架(以下「固定」)の割合が旧館より大幅に減少

表1 旧館と新館の施設概要

	旧館	新館
階数	地上5階・地下1階	地上4階・地下1階
延床面積	4,752.27㎡	6,607.48㎡
収容冊数	約45万冊	約70万冊
閲覧座席数	602席	650席

資料を絞り込む必要が生じた。参考図書、集密には入らない大型図書に加え、当館で最も利用が多い和書の資料群を固定に置くこととしたが、和書は所蔵量も多いため、その全てを固定に置くことはできず、発行年一〇年以内(二〇一四年以降)は固定、それ以前は集密と分けることを決定した。移転時、発行年の区切りを二〇一四年以降としたのは、二〇二〇年度末にはキャンパス統合に伴う西生田図書館からの蔵書移動を控えており、その後しばらくの調整時期を経て、二〇二三年度に発行年一〇年以内は固定、それ以前は集密となることを想定している。以後、その時の書架状況によるが、基本的に発行後一〇年を超える和書は固定から集密等に移動する予定である。大学図書館にとって図書を発行年で分けることは望ましくはないが、専門分野が多岐に渡る本学において、特

定分野のみ全ての和書を固定に置き、その他の分野の和書は全て集密に入れるという選択はしがたくこの結論に至った。その上で、特に古い資料も必要とする文学、歴史については、複数のフロアを行き来することなく利用できるよう、集密と同じ地下一階の固定に新しい和書も配架することとした。旧館では同じ棚に並んでいた和書の移動先が、新館では固定と集密に分かれるため、行き先の識別が必要となり、二〇一六年秋から固定に移動する和書の背に黄色のマスキングラベルを貼付し、OPAC上の配架場所データの変更準備も開始した。



旧館 2019年2月19日

二〇一八年三月、移転業務を委託する業者を決定し、同年五月から月例打合せを開始した。このたびの移転では、蔵書配架計画のうち、何階



新館 2019年3月15日

このあたりにこの資料群を配架する
という書架の面単位での割り付け
の基本計画ならびに棚板一段ごとの
再配架に関する条件を当館から示

し、棚板一段ごとの再配架シミュ
レーションは業者に委託した。再配
架シミュレーションは、旧館の資料
配架状況（棚板計測）、新館の書架
配置計画を把握し、棚
板一段ごとにその棚に
置く資料の塊を計画し
ていくものである。複
数回の打合せを経て二
〇一九年一月末、再配
架シミュレーションが
完成した。

二〇一八年度の開館
は後期試験終了日の一
月三〇日にて終了。こ
の日が長い歴史のある
旧館の利用最終日と
なった。蔵書の移動は、
旧館での図書のパ
ーコードラベル読み取
り、梱包、トラックで
の運搬、新館への搬入

再配架という手順で業者により行わ
れる。作業期間は二月～三月の約四
〇日、蔵書移動量は箱数約二万数百
箱の他、ブックトラックでの移動分
もあり、作業スタッフ数は状況によ
り異なるが約二〇数名、作業時間は
九時～一七時という計画が示され
た。作業には新館で再利用される既
存家具、事務室の移転も含む。移転
開始時、新館は竣工に至っておらず、
図書館スタッフは移転作業に伴う業
者からの質問等への対応、事務室移
転のための整理・梱包に加え、新館
の展示台、ロッカー、閉館時返却ポ
ツ、サイン、電源・LAN・電話、
既存家具の移動など学内外関係者と
の新館の打合せを継続していた。旧
館内の隅々を整理する過程では、上
代タノ元学長の日記等、茅野蕭蕭・
雅子夫妻関係資料といった貴重な資
料が発見され、成瀬記念館に引き渡
した他、かつて図書館オリエンテー

シヨンで使用していたスライド(昭和四〇年から五〇年代の図書館内やキャンパス内の写真)、旧館の建築模型も記念館に移管した。

業者とは週一回会議を持ち進捗状況を共有した。二月末の段階では梱包が約一週間の遅れとの報告があった。三月初めの新館の建物検査終了後に、作業時間を二〇時または二二時まで延長し進捗度を上げていくことになった。三月一五日、新館が竣工する。綿密な再配架シミュレーションがなされていても、現場では次々に調整・判断すべきことが生じる。図書館スタッフは三月中旬から新館への入館が可能となり、再配架状況の確認を行い不備な箇所を修正を依頼するなど業者と連携して作業を進め、同時に書架側板サインの作成等、新館の開館準備も行っていた。この頃、二一時を過ぎても煌々と明かりが灯る新館の姿から各種作

業のラストスパートの切迫度が伝わってきたものである。三月一九日、旧館事務室での業務最終日、夕方から機器・什器の移動が行われ、翌二〇日、新館事務室での業務を開始した。最後に貴重書を移動し、三月二二日、業者より全ての作業完了と報告があった。家具類の移動状況は施設課が、蔵書の再配架状況は図書館スタッフが総出で最終確認を行い、三月二六日、移転作業の検収を完了した。

当館では次段階として二〇二一年二月～三月にキャンパス統合に伴う蔵書移動を予定しており、引き続き準備を進めている。蔵書六六万冊規模の図書館を約二ヶ月の閉館で移転するのは、かなり厳しいスケジュールであったが、図書館移転の経験豊富な業者による計画・実施、施設・システム・警備等学内関係部署の協力、図書館スタッフの総力の結集に

より、何とか無事に四月一日のオープニングセレモニーの日を迎えることができた。すべての方々に深く感謝申し上げるとともに、利用者の皆様に新館を存分に活用していただきたいと願っている。

(図書館事務部長)

なかそね みどり

参考文献

- 浜口都紀「図書館(目白)の移転作業について」『日本女子大学図書館だより』2019, No.164, p.4-5)

展示と資料

日本女子大学の卒業論文

— 学びの集大成からみる学園史 —

大門 泰子

成瀬記念館では二〇二〇年一月一四日から三月四日まで「卒業」をテーマにした展示をおこなった。第一回卒業生（一九〇四年）の証書をはじめ、時期によって変化した六つの形態の卒業証書と学位記、一九一六（大正五年）から六九（昭和四四）年までの卒業アルバム九点、そして一九一六年から五三（昭和二八）年までの卒業論文七点を並べ、日本女子大学の「卒業」の一端を表現した。

本稿では展示した資料のなかから来館者の眼をひいた本館所蔵の卒業論文に関して述べるとともに、展示しきれなかった他の卒業論文二七四点の題目、及び執筆者四九六名の氏名一覧をあわせて紹介したい。

卒業式

一九〇四（明治三七）年四月九日、第一回生の卒業式が挙行された。満開の桜のもと、一二人が卒業証書を受け取った。女性の高等教育への理解が無かった当時、入学しても病気や結婚など様々な理由で入学者の半数近くが退学していた。祝辞を述べた西園寺公望は

…世間が女子の学問を歓迎すると然らざるとは、即ち卒業諸君の行状如何に在りと考へます、諸君は社会の如何なる方面に御出でなさるに拘らず益々恭儉の徳を修められて親切に叮嚀に其の学ばれた所を实地に施されんことを希望いたします、而して一方に於ては何處までも此の本校の主張を發揚なされて世

間の同情を博することを努め且成るべく各自相ひ提携して女子の天賦の地位を開拓せられ遂に東洋全体の女子の面目に及ぼすことを努められんことを希望いたします。

〔卒業生に望む〕⁽¹⁾

と卒業生への期待を述べた。「醜婦保護所」「目白台の姥捨山」などという女子大学への中傷を受けながらも、修業年限の三年間、多くの壁を乗り越え、「正式に高等なる学科を修めて」たどりついた卒業であった。卒業生総代は「あはれ吾等が行くところ、姉ともたのむ先輩ありて、荊を刈り道をひらきて待ち迎ふるにあらず、おもへばかなしくこゝろ細き初旅なりや」と謝辞のなかにこの先への不安をにじませた。⁽³⁾

以来一六六年間、本学は毎年春に卒業生を送り出してきた。太平洋戦争中は繰上げ卒業で九月や一二月に式が行われたものの、終戦から半年後の一九四六年三月には、再び本来の時期に卒業式が行われた。⁽⁴⁾ 五一（昭和二六）年三月には旧制最後の卒業生（四八回生）と新制大学最初の卒業生に証書が授与された。しかし、二〇一一（平成二三）年三月二〇日に開催される予定であった卒業式は東日本大震災のために行われなかった。また二〇二〇（令和二年）三月二〇日の卒業式は新型コロナウイルス

感染拡大予防のために行われず、学位記は郵送で授与された。こうした卒業式の中止は、本学だけのことではないが、人々を震撼させた社会的混乱の指標として、来年一二〇周年を迎える学園の歴史に刻んでおくべきことである。

卒業論文

日本女子大学は、一九〇一（明治三四）年の創立当初より、卒業論文の提出が卒業の必須要件であった。創立時の「日本女子大学校規則」には

第五章 及落卒業

第十七條 卒業 生徒の卒業は各科目平常の成績と卒業論文とを参照し教員会議の議決を以て之を評定す

と記されている。創立者成瀬仁蔵は、一九〇三年九月に「日本女子大学の二百十日」と題した講話のなかで卒業論文に対する考えを次のように語っている。当時は修業年限が三年であったため、まさに初めての卒業論文に臨んでいる学生へのメッセージである。

先づ個人／＼に大に努めねばならぬところの事柄は、三年生の卒業論文であらうと思ひます。此卒業論文は、此一期間に於て其大部分が纏らなければな

りませぬ。此卒業論文を書くといふ事も、決して新しい研究を今日から始るのでは無い。既に此学校の始りから研究した所のものを綜合するのであります。あなた方は此学校に於て、又は他の高位によりて得た所の総ての智識を綜合して、茲に一つの新しい Conclusion 即ち断案を得るのであります。然るに私の云ふ所の卒業論文とは、あなた方の思想を組立て、綾なす文章に御書きになつたのを指して、私は論文とは申しませぬ、あなた方の力を盡して研究した所の結果が凝つて御名々の品性となり、長く否、御名々の生涯の基礎となるべきやうに、自分の身体の上自分の心の上に於て、論文を組立てるのであります。

(日本女子大学校の二百十日(三十六年九月講話)⁵)

成瀬は出来上がった論文の体裁ではなく、各自が問題意識を持つて卒業論文をまとめる過程こそ、人としての品格を高め、学び続ける生涯の基礎になり得ると考えていた。自学自動、生涯学習を理想とする教育に欠くことのできない原点が卒業論文であったといえよう。成瀬の「教育は其の生涯に涉りて廢すべからざるものにして、学校の卒業を以て之を限るべきに非ず」⁶「卒業は恰も修養の終りであるかの如く考へ、これと同時に今迄の修養

が下火になつて来るといふことは大に考へなければならぬ」という言葉からもわかるように、「卒業」はこれからの人生においても学び続けるスタートを意味していた。

『日本女子大学校 学報』第三号(一九〇四年六月)には、第一回国文学部卒業生二名の卒業論文が抄出掲載されている。その一人、高松田瀬子は西行法師、吉田兼好、鴨長明の「境遇、思想及び性格の、差異同一の点」を比べ、それぞれを梅、桜、梨の花にたとえた。そして「梨は悩まし気に、優しけれども、色あくまで白く、結ぶ実、味殊によし。梅の味の強きはあらねど、素直に奥床し。桜の艶には劣れど、清く高きこと、其の比にあらず」と結ぶ。研究対象から己の生き方を見出そうとしている。高松にとって、卒業論文は人生の指針を定めるうえで礎となつたであろう。

成瀬記念館所蔵の卒業論文

成瀬記念館には旧制日本女子大学校時代から新制日本女子大学時代初頭(一九五〇年代初め)にかけての卒業論文二八一点が保管されている。その一覽は後掲の表の通りで、家政学部に関連する題目が大多数である。これらの二割ほどは卒業生やそのご家族、退職された先生から個人的に寄贈されたもので、あとの八割は学内の研究

室等に長く保管されてきたものである。それらは一九九〇年代になって成瀬記念館に持ってこられた。⁽⁸⁾

前者は記念館で受け入れた後、直ちに整理保管され、展示や研究資料として生かしてきた。しかし、後者は度重なる記念館の資料保存スペース域の削減や移動の憂き目に合い、未整理のまま二〇〇八年春からは成瀬記念講堂地下の倉庫に置かれてきた。一八年秋、講堂耐震工事後に漸く記念館内に運び込まれ、一点⁽⁹⁾ごとに状態の点検、卒業生名簿と照合する作業に着手した。時代によって修業年数や学部・学科名が変わったり、女性の場合、卒業後数年で姓が変わることが多かったりするため、作業は難航した。なかには、進級論文や授業に関するレポートも五〇点あまり含まれていたが、いずれも当時の授業を反映する貴重な資料として卒業論文と同様の整理をおこなった。

論文の他に、論文題目と氏名の記された紙資料、冊子なども数点あった。論文に対する指導教員の講評などが記されたものもある。新制大学になってからは卒業生全員の論文題目が毎年の学部別紀要に掲載されているが、旧制時代はそうしたものが無い⁽¹⁰⁾ため、貴重な資料である。次頁の表は現在、卒業論文の題目と執筆者名を確認できている総数を卒業年、回生と学部別にあらわした一覧で

ある。表中、典拠資料欄の『家庭週報』とは、同窓会紙(週刊)のことで、同紙にも論題や論文をめぐる話題が卒業の前後の時期に多数掲載されている。

展示した卒業論文

この度の展示では、時代や学部の異なる七点の卒業論文を展示した。

①『Shakespeare and Sorinshi』一九一六(大正五)年

英文学部 一三回生 本田こま
イギリスの劇作家・詩人のシェイクスピアと歌舞伎作家の近松巢林子(近松門左衛門)を対比した英文の論文である。近松の作品「国姓爺合戦」と「曾根崎心中」に登場する女性、シェイクスピアの作品「カイザー」に登場する女性、そして「オフエーリア」を取り上げた。歴史劇で描かれる女性について、さらに二人の劇作家に対する論評を一万三千語あまりの英文で表現している。女性と男性の描かれ方にも注目している。

We can see the condition and pleasure and other thoughts of the women of Genroku period through Sorinshi's female characters. These women expressed by Sorinshi have not so clear individualities as the male

旧制卒業論文題目判明数一覽

2020年5月現在

卒業年	回生	学部別題目数	典拠資料名
1909 明治 42	6	家政学部 68 題目 教育学部 45 題目 国文学部 34 題目 英文学部 19 題目	「明治四十二年四月 第六回生卒業論文問題一覽表」
1911	8	家政学部 59 題目 教育学部一部 ※1 9 題目 教育学部二部 11 題目 文学部 ※2 22 題目 英文学部 題目記載なし	「明治四十四年三月 第八回生卒業論文問題一覽表」
1912	9	家政学部 51 題目 教育学部博物科 6 題目 教育学部理科数学科 5 題目 文学部 ※2 14 題目 英文学部 6 題目	「明治四十五年三月 第九回生卒業論文問題一覽表」
1913 大正 2	10	家政学部 20 題目 教育学部文学部 ※2 15 題目 教育学部家政科第一部 5 題目 教育学部家政科第二部 11 題目 英文学部 題目記載なし	「大正二年四月 第十回生卒業論文問題一覽表」
1917	14	家政学部 18 題目 教育学部家政科第一部 16 題目 教育学部家政科第二部 34 題目 英文学部 題目記載なし	「大正六年四月 第十四回生卒業論文問題一覽表」
1919	16	家政学部 26 題目 師範家政学部 63 題目	「大正八年四月 第十六回生卒業論文問題」
1922	19	家政学部 66 題目	「大正十一年起 家政学部卒業論文目録」
1923	20	家政学部 49 題目	「大正十一年起 家政学部卒業論文目録」
1924	21	家政学部 72 題目	「大正十一年起 家政学部卒業論文目録」
1925	22	家政学部 1 題目	「大正十一年起 家政学部卒業論文目録」
1926	23	家政学部 64 題目 英文学部 30 題目	「大正十一年起 家政学部卒業論文目録」 『家庭週報』833号(1926.3.26)
1929 昭和 4	26	家政学部 135 題目 国文学部 52 題目 英文学部 41 題目 師範家政学部 52 題目 社会事業学部 39 題目	『家庭週報』971号(1929.2.15) 〃 〃 〃 『家庭週報』972号(1929.2.22)
1930	27	家政学部 59 題目 国文学部 60 題目 英文学部 38 題目 師範家政学部 23 題目 社会事業学部 21 題目	『家庭週報』1019号(1930.2.28) 〃 〃 〃 〃

卒業年	回生	学部別題目数	典拠資料名
1931	28	家政学部 84 題目 国文学部 46 題目 師範家政学部 68 題目 社会事業学部 17 題目 英文学部 41 題目	『家庭週報』1067号(1931.2,27) 〃 〃 〃 〃
1932	29	家政学部 103 題目 国文学部 51 題目 師範家政学部 78 題目 社会事業学部 6 題目 英文学部 40 題目	『家庭週報』1118号(1932.3,4) 〃 〃 〃 〃
1933	30	家政学部 78 題目	「大正十一年起 家政学部卒業論文目録」
1934	31	家政学部 91 題目 師範家政学部 95 題目 国文学部 51 題目 英文学部 37 題目 社会事業学部 8 題目	『家庭週報』1213号(1934.2,16) 〃 『家庭週報』1214号(1934.2,25) 〃 〃
1935	32	家政学部 36 題目	「大正十一年起 家政学部卒業論文目録」
1936	33	家政学部 27 題目 家政学部二類 41 題目	「大正十一年起 家政学部卒業論文目録」 「昭和十年度論文点評綴」
1937	34	家政学部 37 題目	「大正十一年起 家政学部卒業論文目録」
1939	36	家政学部一類 24 題目	「大正十一年起 家政学部卒業論文目録」
1940	37	家政学部一類 26 題目 家政学部二類 70 題目 家政学部三類 ※3 13 題目 国文学部 7 題目 英文学部 17 題目	『家庭週報』1461号(1940.2,23) 『家庭週報』1462号(1940.3.1) 『家庭週報』1463号(1940.3.15) 〃 『家庭週報』1964号(1940.3,22)
1941.12	39	家政学部一・二類 49 題目 家政学部三類 三題目 国文学部 54 題目	『家庭週報』1541・42号(1942.1.30/2.6) 『家庭週報』1543号(1942.2.13) 『家庭週報』1545号(1942.2.27)
1942.9	40	家政学部一類 32 題目 家政学部二類 37 題目	「昭和十七年度 家政学部一類四年 論題」 「論題一覧表」
1943.9	41	家政学関連学科 76 題目	「昭和拾七年起 家政学部卒業論文目録」

・ 題目が判明している卒業論文は執筆者も判明している。共同執筆もある。

※1 教育学部は師範家政学部、家政学部二類へと名称を変更する。

※2 国文学部のことを文学部、教育学部文科と称していた時期がある。

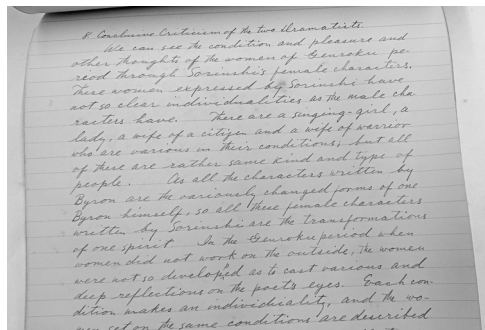
※3 社会事業学部が名称を変更した。

characters have. There are singing-girl, a lady, a wife of a citizen and a wife of warrior who are various in their conditions, but all of these are rather same kind and type of people. ...

近松は元禄時代の女性の状況や喜び、考え方などを描いているものの、女性の個性は男性ほどにはつきりと描いていないこと、謡の少女や一般の女性、庶民の妻、様々な階級の武士の妻を描いているが、これらすべての女性と同じ類で描かれていると分析している。

用紙の大きさは26 cm × 21 cmの横罫用紙五五頁にわたり、筆記体で記されている。当時は筆記体が主流であったと思われる。

なお、英文学部の論文の所蔵は少ないが、そのなかの一つ、一四回生の和田とみとは後の高良とみである。高良は戦後、世界平和運



動家として知られる人物であるが、「nature」と題する論文を提出してゐる。⁽⁹⁾

②『母』 一九一九(大正八)年

師範家政学部一六回生 野呂寿子
後に本学家政学部教授となった氏家寿子の卒業論文で、論文の草稿であるノートとともに寄贈された。本学創立者成瀬仁蔵の教えを直接受けた最後の世代である。⁽¹⁰⁾ 師範家政学部は高等女学校家事科の教員を目指す学部でもあった。筆者は、三年間の学びの集大成として、これからの女子中等教育の理想を記す。

要するに私は従来⁽⁹⁾の良妻賢母主義では満足することが出来ない。教育が進んでも尚、女学校丈でその余の研究時間なくして、少しの研究生活もしないで、母たるの日に入る婦人の多い時代に於ては、少し位の困難や不都合は如何様にか工夫して、国にとつては忠良なる国民、社会人類にとつては完全なる一員を、つくるの母をつくる為に、もっと力を入れてほしいと考へて居るのである。

せめて女学校丈でも不用意な無分別な「母たる可き婦人」をつくり出して国かの損害、世の不幸をいたすこと、なき様にと私は繰り返して叫ぶのである。

折しも第一次世界大戦が終わり、日本の世界的地位が上がるなか、氏家は「忠良なる国民」を育てるための「母」の育成を重視し、「皇国をいよく栄えしめ世の幸福に捧ぐるところの良国民を育てる母」を目指すとして述べている。母が国家に対して果たすべき役割を追求していたといえよう。

③『美術方面より見る源氏物語』一九三三(昭和八)年

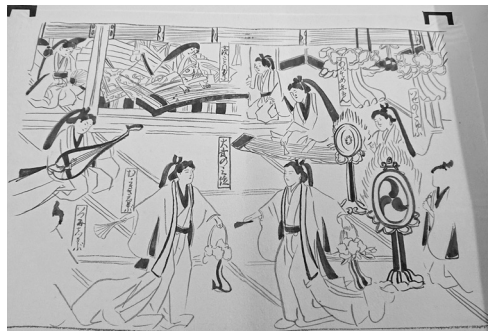
国文学部三〇回生 小松さと
26 cm × 45 cm の用紙一二三頁に及ぶ紙面に色鮮やかな模写や絵葉書などが随所に散りばめられ、物語の分析がおこなわれている。表紙裏に貼られた「論文選定の動機」には

病床に於いてふと手にした与謝野晶子氏著の新訳源氏物語によつて源氏物語に非常な興味を覚え更に第三学年に於いて武島羽衣先生の源氏物語の講義に原文の面白さを知り五十四帖を読破せんの欲望にかられ手塚昇氏の「源氏物語新研究」藤岡作太郎氏の「国文学史平安朝篇」山口剛氏の「源氏物語研究」五十嵐力氏の「新国文学史」を読み又学校に開催された島津久甚先生の「須磨明石を中心とせる」講義、紫式部学界に於ける池田亀鑑先生の講義を聞いて文

学と絵画との交渉を求めようとの従来の野心の第一歩を源氏物語に求めようとの研究を始めました。

と、記されている。本人は「未完成。従来の源氏物語を知るにのみ忙がしく自己の見界をのべてゐません」とも記しているが、全員から源氏物語への深い思い、知りたいという欲求があふれている。国文学部教授の武島羽衣^①に提出されたものである。

現在記念館で所蔵している国文学部の卒業論文は僅かしかない。四回生(一九〇七年卒)竹山ひさの論文「源房」は最も古い。和紙に墨書されている。四一回生(一九四三年九月卒)の「女房詞の研究」をまとめた国田百合子は後に本学文学部国文学科の教授となり、『女房詞の研究』(一)『女房詞の研究 続編』(一九六四・七七年 風間書



本文中に挿入された墨で描かれた絵

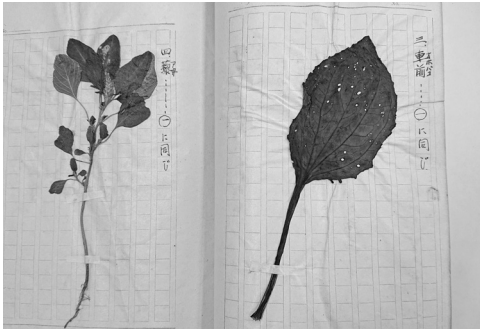
房)を著した。卒業論文がまさに生涯の研究の出発点となっている。

④『満州に於ける野菜貯蔵と野草料理等』

一九四三(昭和一八)年

家政学部一類 四一回生 星原紀子

四一回生は一九四〇年四月に入学し、本来であれば四四年三月に卒業のところ、四三年九月に繰上げ卒業となった回生である。



藤(あかざ)

車前(おおぼこ)

日に日に戦時色の濃くなっていく時代に学生生活を過ごした。朝鮮や満州、樺太、台湾をはじめアジア各地が日本の植民地となっていた。星原は満州の食糧問題に取り組んでいる。押し葉を使って植物の説明をしたり、調理法を説明したりしている。反省

の言葉として短い期間でかつ、言葉が不自由なために「非常に纏まらない」「科学的な検討がしていないので、実際に測定して完成すべきと思ふ」と記している。半年早く卒業しなければならなかった無念もあったであろう。

論文の最後は「御国のために、上御一人に帰一し奉り、総てを捧げて日夜努める一人々々の戦士の力の泉は生活、家庭生活にある。満州の家庭生活がもつとく、科学的に考究され、大陸の気候風土に即応したものが生れ出る事を望んで止まない次第である」と結ぶ。家政学部に学んで、単なる家事の技術だけではなく、生活を科学的に考えることの必要を修得していた。とはいえ、戦時下の「科学」は両刃の剣である。戦争目的のために、人々の主観や行動を有無を言わずに封じる力となり得る「科学」の歴史も考えさせる資料といえるだろう。

⑤『救荒植物とその調理法』 一九四三(昭和一八)年

家政学部一類四一回生 山本幸枝・山村富美・柳次男

山田紀代子・金澤りやう・吉岡美智子

救荒植物とは山野に自生し、戦争や飢饉の際に食糧となる植物のことである。図鑑のように、植物のカラースケッチ画とともに、植物を紹介している。戦時の食糧事情を反映した卒業論文はこの時期とても多く提出されて

いる。

昭和の初め、戦争が始まる前の一九三一年（二八回生）に提出された食物に関する論文の場合、「流動食について」「糖尿病食餌療法献立の一部」といった管理栄養学的なテーマの研究が多く見られる。しかし一〇年後の四一年（三九回生）になると「主食（市販米・高粱）の栄養価について」「新興食糧米及び穀の栄養価値並に其の利用」といった題目から明らかなように、代用食が食物研究の中心となつてい



たんぼぼ

る。一九三九年に白米禁止令が出され、翌年からは節米運動、さらに翌年には米の配給通帳制度と、この時期の米をめぐる動きは厳しくなる一方であった。一方、一九四〇年一月に初めて「国民栄養食基準」が定められ、国民の健康と栄養への関心が煽

られて、婦人雑誌にも、「栄養」をうたう献立メニューが紹介されている。「食糧報国」という言葉も用いられている。

こうした状況下、節米と栄養の両方を叶える研究が「野草料理」「救荒植物の調理」であった。「車前（おおばこ）や「藜（あかさ）」「たんぼぼ」の調理研究が卒業論文となるほどに戦時生活は追い込まれていた。それが戦争であったことが伝わってくる。

戦時色を帯びる卒業論文の傾向は、生活管理や住居に関する論題にもあらわれている。戦時下の教育や国民生活を知る上で、卒業論文は興味深い資料といえる。

⑥『食品の害虫』

家政学部二類四四回生 近藤千鶴子・植林洋子

一九四七（昭和二二）年 藤井敏子・横田芳子

四四回生は一九四三年四月に入学した。その翌年に入学した四五回生は学制改革により学部組織が大きく変わり、三年制となり修業年限が短縮された。そのため、四四回生と四五回生は四七年三月に卒業の年を迎えた。四四回生と四五回生が共同執筆している卒業論文（例えば「鯨肉食用化に関する研究 第一編」）もある。どちらの回生も軍需工場への動員等で授業時間が割かれ、

勉学をする時間が最も少なかった世代である。

一九四五年秋に授業が再開されてから一年余り、後掲の表でも明らかのように、戦後は自分の関心に即した科学的な実験・研究を題目とした卒業論文が並ぶようになった。戦争や耐乏生活にまつわる研究はなくなっている。展示で紹介したこの卒業論文は、食品につく害虫をこまかくスケッチし、その分布や生態を調査した研究である。冒頭の緒論は力強い。

科学を日常生活にとり入れるには、ありとあらゆる要素を考へなければならぬ。

終戦後日本は、「婦選よりも憲法よりも食糧を」とまでの悲痛な叫びの下に食糧危機打開を叫んで来た。それ程私達の台所生活は、全々一食一食に迫られてやり繰りを過して来たのだ。しかし、顧るに、その乏しい食糧に対して、どれ程適切な知識がもたらされてゐたであらうか。動々ものとしての家政学の認識が幾人の主婦によつて掴まれてゐたであらうか。目先の生活事務の個々の処理といふ、功利的技術にとらはれてゐたのではなかったか。栄養確保の為の努力が無駄になって、遂に如何ともする事の出来ない状態に陥り、唯々満腹感を与える事だけに全力を掛けて栄養の常道を逸した日本体力と同様



に、押込みへ買ひ込まれる生命の糧に対しても、何ら科学的考慮が払はれず、徒に蒐収本能の満足の方に過ぎなかつたのではあるまいか。乏しい食糧が身近々この動物的欲求満足が目的となつて、物質に氣候と温度と湿度が如何に影響を及ぼすか、それによつて生じた害物は、食物の効果を何パーセントに低下せしめるか、併しそれらの虫の中には、自ら害する虫と益する虫がありはしないか。の問題を閉却するに致つてゐる。手間をかけても、

実際の食糧価値を高めたい、原因の究明のよろこびにひたりたい。合理化をよるこぶ近代精神の中にあつて、これだけの考慮は常に態度としてありたいと思ふ。人文科学的に考へての今日の因襲と、自然科学的に考へての今日の無知なる事を取去つて、

総合的に時代としての生活観を明らかにしつつ、新しい創造をめざして、われわれは努力しなければならぬのだ。

戦争中の非合理的な生活への批判から出発し、問題を自分たちの手で原因究明すること、科学的に考えることの価値を堂々と表明した。家政学に対する自信と戦後の意気込みを感じることができる。

⑦『女子の宗教に関する研究(一)(二)(別冊)』

一九五三(昭和二八)年

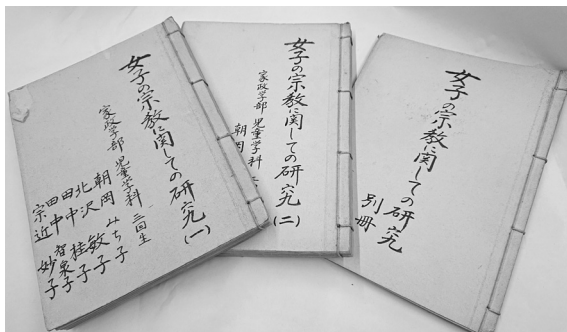
家政学部児童学科新制三回生 朝岡みち子・北沢敏子

田中桂子・田中智泉子・宗近妙子

日本女子大学校は一九四八(昭和二三)年三月に新制大学の認可がおり、日本女子大学となった。この年は入学者の募集を行わず、前年の四七年四月に旧制で入学した者の希望者が新制大学の一年生となり、さらにその前の四六年四月に入学した者の希望者が新制大学の二年生となった。ゆえに、四九年四月の入学者が新制大学になってから初めて入学した学生となる。その学生たちが四年間学び、新制三回生として五三年三月に卒業した。

この卒業論文は家政学部月田カン教授が戦前におこなった研究を引き継いだもので、筆者らが中学生・高校

生男女に宗教に関する質問調査を実施し、その結果について考察している。「神や仏の奇跡又は不思議をどう考えるか」という質問への回答を戦前と戦後で比較し、「奇跡があると肯定」したものは戦前が四六%に対し戦後二二%、「奇跡はないと否定」したものは戦前が四〇%で戦後は四六%という結果を得た。この結果に対し、単に



戦前と戦後のちがいでという観点で論ずるのではなく、進化論者たちの宗教観を引用しながら「不可思議なものに対しての妄信の見解から疑問的見解えの変化は文化の進歩を示すものであり廿世紀の科学を根拠とした機械文明が急速に進歩し発展しているものであることは否定し得ないものであろう」という考察を導いている。

論文のまとめに記さ

れている次の一文は意義深い。

中学及び高等学校の生徒に無批判的に昔からの宗教の形式を強制し又その宗教的行為を押しつける方法でもって生徒に眞の宗教的感情を起させるといふ事はそれ程強い力をもっているものではない。この様な方法で他の人々から即ち外部的に与えられた宗教的思考は一時的にその精神現象を左右することはあるがその刺激が去ると又之にもどるものであるから眞に宗教的教育の働きをするものではない。又一時信じたことであつても何かの機会にその信仰が破れることもあるものである。

戦中から戦後にかけての激変した教育観のもとで初等・中等教育を受けた五人の筆者らにとつて、こうした結びに至る過程は彼女たち自身の受けた軍国主義教育の清算になつたのではないだらうか。

卒業論文が伝えること

ここに七点の卒業論文を紹介したが、論文は日本女子大学の教育を学生たちがどのように受け止めていたかを示すと同時に、当時の学生の問題意識を強く表す資料と位置付けられる。その題目からは当時の世相が浮かび上がってくる。日本の歩みを語り直す上で貴重な歴史的

資料である。

こうした数々の卒業論文は学園史を豊かに織りなす資料として受け継がなければならない。学生たちは女性蔑視や戦争など様々な困難と向き合い、苦労しながらも論文を書き上げた。卒業論文は学生側が発信する本学教育の真髓を力強く伝える資料といえるだらう。一九三九（昭和一四）年一月の『家庭週報』に「論文完成までの私たちの苦しみは、今想へばむしろ楽しい苦しみでした。はじめで自分自身に身についた研究が出来たからなのです。それぞれ個性を発揮した真剣さで楽しげに苦しんでゐました」論文を了へるまでに私たちは「分今まで知らなかつたいろ／＼の事を知りました」という学生の言葉がある。楽しい苦しみを、ほろ苦く甘い「チョコレートの様なもの」と例えている。論文完成に至る過程こそが本学の教育であることを知つた学生の喜びの声に聞こえる。

成瀬記念館では今後も卒業論文の収集を続け、厚みのある学園史を構築していきたい。

（成瀬記念館スタッフ おおかど やすこ）

注

- (1) 『日本女子大学校 学報』 第三号 (明治三十七年六月) 一五頁
- (2) 河岡潮風「女子大学評判記」(『冒険世界』 明治四一年一〇月)
- (3) 前掲『学報』 一六三頁
- (4) 一九四六年三月に卒業した四三回生が後年に思い出して記した記録によれば「戦争が終って最初の卒業式を祝うため生徒だけで作った卒業の歌」を「卒業生のみの大合唱で平和をよろこぶ歌声が講堂にひびき渡った」という。その歌詞は以下の通りである。

あけぼのを告ぐる鐘のしらべや／今ぞあらたなる春の訪れ／もゆる光につばさかわし／いざかけりゆかん青空のはて 嵐にひるまぬ若き命／四とせのまなび今ぞ終えて／めざす緑の雲よ高嶺よ／師の御教えを心にしめて／愛とまことにいざ進まん
- (5) 『日本女子大学校 学報』 第二号 (明治三十六年一二月) 二四頁
- (6) 成瀬仁蔵『新時代の教育』 (大正三年二月) 九七頁
- (7) 成瀬仁蔵「わが卒業生に告ぐ(二)」(『家庭週報』 462号 大正七年四月二日)
- (8) 成瀬記念館は一九八四年に開館し、創立者成瀬仁蔵

関係資料及び学園史関係資料の収集と保管、発信、レファレンス対応などを行っている。

- 記念館ができるまでは、こうした資料は成瀬仁蔵旧宅(現、成瀬記念館分館)や成瀬記念室、図書館などに置かれ、整理が継続されていた。学園が戦禍を免れたこと、創立者や創立期の文書や品を丁寧に保存する卒業生らが学園内にいたこと、戦前の高い教育水準を占領軍から評価されたことなどが、学園関係資料を残す土壌となっていた。成瀬記念館の業務が学園内外に周知されるに当たって、整理に迷った資料の数々が持ち込まれるようになった。後に薬学博士となった鈴木ひでる(一九一〇年卒)の割烹着(実験着)、学園の歌を数々作曲した一宮道子(一九一八年卒)のスコアブック、附属中学校のクラス新聞、小学校や幼稚園で配布された手紙や記念品など、貴重な一点資料の寄贈を受けている。学園資料を収集する拠点が学内にあることに加え、長年に渡って卒業生と関係を築き、知識の蓄積を担当する職員がいることは学園史を後世に伝える上で重要なことである。
- (9) 一八九六年生まれ、本学英文学部卒業後、米國に留学。九州大学医学部助手を経て、本学教授となる。一九四七年から二期、参議院議員をつとめた。四九年世界平和者会議に出席、以後、国際平和運動に奔走する。

五二年モスクワ世界経済会議に出席、さらに同年日本人として初めて新生中国を訪問し、第一次日中間貿易協定を締結した。五三年には日本婦人団体連合会（婦団連）を結成し、副会長となる。

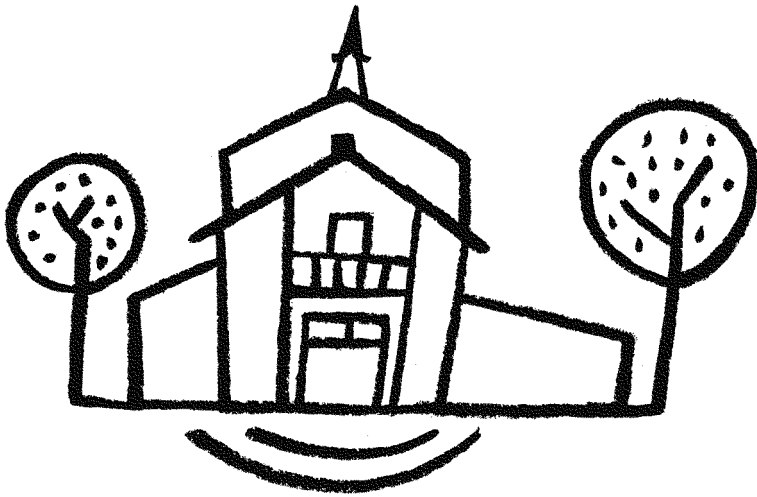
(10) 成瀬仁蔵は一九一九年三月四日に没した。

(11) 武島羽衣は国文学者として約五〇年間、本学で教鞭をとった。詩人、歌人でもあり、名歌「花」（春のうららの隅田川……）の作詞者である。

(12) 国文学部一九四一年卒業の青木生子（第九代学長）の卒業論文は国文学部雑誌「国文学研究叢書第一輯」（一九四三年）に活字となって残っている。青木はその後東北大学に学び、生涯研究を続けた。

(13) 「主婦之友」一九四一年二月号一九七頁。同誌には毎号「栄養」や「配給」「節米」をかかげる料理が登場している。

(14) 「満州の衛生」「満州開拓住宅につきて」（一九四二年度）、「決戦下の生活費問題」（一九四三年度）といった題目を論題一覧に散見できる。残念ながら、論文自体は所蔵していない。



成瀬記念館所蔵卒業論文一覧(1907年～1953年卒業) 2020年5月現在

回生	卒業年	学部 学科	氏名	論題
4	1907 (明治40)	国文学部	竹山ひさ	源親房
9	1912	家政学部	小野玉枝	食物論
10	1913 (大正2)	国文学部	雨森誠子	鎌倉時代の声
13	1916	英文学部	小泉しづ	A Light
13	1916	英文学部	是沢てい	タイトルなし
13	1916	英文学部	広川みす	Art and Religion
13	1916	英文学部	本田こま	Shakespeare and Sorinshi
14	1917	家政学部	菊池隆子	境遇
14	1917	英文学部	小口京	Sonia Kovalevsky
14	1917	英文学部	深尾経	Lafcadio Hearn (小泉八雲)
14	1917	英文学部	和田とみ	Nature
14	1917	教育学部二部	田口好	家庭教育
14	1917	教育学部二部	山下静枝	恋愛の所感
14	1917	教育学部二部	米澤文	家庭ニ於ケル児童教育
15	1918	師範家政学部	殿村文野	論文 宗教心の鼓動
16	1919	師範家政学部	野呂寿子	母
19	1922	師範家政学部二部	増田春枝	上古及中古の食物
23	1926	社会事業学部 児童保全科	光吉光代	天才者と社会との関係
24	1927 (昭和2)	社会事業学部 児童保全科	松本富士子	民衆娯楽(演劇に就きて)
26	1929	家政学部	内山雪子	食品研究の一端
26	1929	家政学部	海江田政子	青年期に於ける食物の傾向と注意
26	1929	家政学部	上澄子	腎臓疾患の食餌法
26	1929	家政学部	鈴木久子	食物研究の一端
26	1929	師範家政学部	松浦しの	魚の栄養調理法
26	1929	社会事業学部 女工保全科	山中志磨子	基督教ニ付イテ
26	1929	社会事業学部 児童保全科	西川藤子	児童職業指導に就ての研究
27	1930	家政学部	小澤さよ	含水炭素制限食餌とその応用
27	1930	家政学部 師範家政学部	浜本せき(家) 青越子(師範) 常田稔(家政)	食物の季節物について
27	1930	師範家政学部	田代タカ 吉田タマ	食糧問題より見たる鰯の一考察
27	1930	社会事業学部 女工保全科	井手すゞ子	製糸女工について
28	1931	家政学部	石田トモ	栄養・経済的な家庭献立に就て
28	1931	家政学部	上田きみえ	流動食について
28	1931	家政学部	岡崎君子	糖尿病食餌療法献立の一部
28	1931	家政学部	奥田ヨシ子	一品料理と献立
28	1931	家政学部	春日和歌子	我が国婦人の健康と食糧
28	1931	家政学部	黒柳潔子	糖尿病患者の食餌療法(其の二)
28	1931	家政学部	田村モトエ	病人食物 糖尿病一品料理
28	1931	家政学部	目貫富美	残飯及糖の利用
28	1931	家政学部	山本信子	児童と色彩の一考察
28	1931	家政学部	遊佐明子	胃潰瘍と食餌
28	1931	師範家政学部	奥山まさ子	食糧問題

回生	卒業年	学部 学科	氏名	論 題
28	1931	師範家政学部	塩澤登以	用途を異にする材の組織学的考察
28	1931	師範家政学部	朴福淳	一般化粧科学
28	1931	師範家政学部	原久子	急性腎炎の食餌に就いて
28	1931	師範家政学部	村上フミエ	羊肉の調理法
29	1932	家政学部	飯泉郁子	食物経済の重要性
29	1932	家政学部	犬飼百合子	健康へ
29	1932	家政学部	友道義子	胃腸病の食餌療法の一端
29	1932	家政学部	中村加寿	精神生活の基調
29	1932	家政学部	服部孝子	糖尿病食餌療法の研究
29	1932	家政学部	林延枝	緑茶に就て
29	1932	家政学部	平位光子	結核の無食塩療法とその食餌
29	1932	師範家政学部	上野淑子	糖尿病患者にあたる間食の研究
29	1932	師範家政学部	加賀美美枝子	人生と植物
29	1932	師範家政学部	木崎シズ	鞣皮及び材の構造
29	1932	師範家政学部	桑野延子	糖尿病に於けるアチドーヂスとその食餌に就て
29	1932	師範家政学部	小杉英子	蓮根の組織及び顕微化学的考察
29	1932	師範家政学部	鱧しげ	児童の偏食研究
29	1932	師範家政学部	須之内きみ江	献立調理について
29	1932	師範家政学部	高橋美津	大根人参牛蒡の組織並びに顕微化学的考察
29	1932	師範家政学部	竹本ゆう子	蛋白質について
29	1932	師範家政学部	橋本哲子	糖尿病患者ニ与ヘルオ菓ニツイテ
29	1932	師範家政学部	村松嘉鶴	児童の間食に就いて
30	1933	家政学部	井都操	食塩
30	1933	家政学部	内田文	果実の研究
30	1933	家政学部	黒田キミ子	我国食糧問題の立場より見たるフィッシュミールの地位
30	1933	家政学部	酒井睦子	工場食の研究
30	1933	家政学部	進藤貞子	学校給食事業の展望及び将来への期待
30	1933	家政学部	菅原とよ	宮城県際節に就て
30	1933	家政学部	田中文子	保健上より見たる玄米
30	1933	家政学部	田辺ふみ	救荒植物
30	1933	家政学部	長峰わか	冷凍魚肉の組織学的研究
30	1933	家政学部	温井フミ	保健上より見たる幼児期の食物
30	1933	家政学部	原田幸子	「喰い合せ」とは何か?
30	1933	家政学部	堀潤子	野菜類の栄養価値と調理法
30	1933	師範家政学部	荒井正枝	我国食糧問題と満州大豆に就いて
30	1933	師範家政学部	岡安ノリ子	米についての研究
30	1933	師範家政学部	長田恒子	糖尿病食餌療法研究の一端
30	1933	師範家政学部	清瀬たづ江	小麦粉についての小研究
30	1933	師範家政学部	後藤淑子	ビタミンBの呈色反応に就いて
30	1933	師範家政学部	古林とみ代	肝臓食研究の一端
30	1933	師範家政学部	齊藤多喜子	動脈硬化症の食事研究の一端
30	1933	師範家政学部	酒井とせ	食用草の組織学的及顕微化学的考察
30	1933	師範家政学部	前田千鶴子	幼児の間食(大阪を中心として)
30	1933	師範家政学部	松島とよ	人口食糧問題
30	1933	師範家政学部	村尾富子	糖尿病間食の実例
30	1933	師範家政学部	山本晶子	季節料理とその栄養価
30	1933	師範家政学部	渡辺智枝子	農村における栄養改善
30	1933	師範家政学部	渡邊ミカ	蛋白質について
30	1933	国文学部	小松さと	美術方面より見る源氏物語
31	1934	家政学部	速水美代子	学校給食に就ての一考察
31	1934	師範家政学部	青野しげみ	急性腎炎食餌療法

回生	卒業年	学部 学科	氏 名	論 題
31	1934	師範家政学部	朝見久子 神代フミ	東京ニ於ケル一銭駄菓子ノ調査
31	1934	師範家政学部	池上みね	学齡兒童の偏食調査
31	1934	師範家政学部	池田静子	本邦食品のビタミン B 含有量と之に及ぼす調理の影響
31	1934	師範家政学部	大原寅子	糖尿病の食餌療法
31	1934	師範家政学部	長島てる	保健食より見たる最低食費見積り研究の一端
31	1934	師範家政学部	松江瑞子	減塩食餌一端
31	1934	師範家政学部	三田志津子	調理に依る栄養素の損失に就きて
31	1934	師範家政学部	峯村光枝	大根について実験そのヂアスターゼの糖化実験
32	1935	大学本科 理学科家政学部	内山ウタ	性格の問題
32	1935	家政学部二類	青葉眞佐子	食物ニ附着セル細菌ノ研究
32	1935	家政学部一類	阿部静子	脚気に対する一般常識諸項
32	1935	家政学部二類	尾本さぬ	ビタミン
32	1935	家政学部二類	蔵元登代	栄養を根底とせる農村料理
32	1935	家政学部二類	三井梅子 山崎隆子	菓子の有害着色料について
32	1935	家政学部二類	宮澤杉	食物及び食物観の変遷
32	1935	家政学部一類	矢部ゆり子	食事進化の跡をたづねて修養に及ぶ
32	1935	家政学部一類	山田千代子	肺結核ノ食餌療法
33	1936	家政学部一類	信太香代子	携帯食品の研究
33	1936	家政学部二類	伊藤美津子 岡本テル子	日本女子大学校寮舎食餌に於ける一考察
33	1936	家政学部二類	井上ヤエ子	古今に於ける料理の秘法
33	1936	家政学部二類	上田さら 穂吉千賀子 中村重子	食品の貯蔵
33	1936	家政学部二類	大野房子 小野房子 須藤美津子 杉村寿子 直井キヨ	カロリー給源として脂肪及び含水炭素を用ひたる場合のビタミン B 複合体の使用量に就いて
33	1936	家政学部二類	尾崎千代 丸里幸	学童の弁当箱に対する一考察
33	1936	家政学部二類	金子敏子	保健食の献立作製に關して
33	1936	家政学部二類	松信田鶴子 小池梅子	兒童の偏食の問題
34	1937	家政学部一類	赤川富美子 小松日出子 神谷久子 児玉文子 渡辺美代子	腎臟病無塩食
34	1937	家政学部二類	宮澤シナ	肝保護食について
34	1937	家政学部二類	武藤シズイ	胃液缺乏症及無酸症の食餌療法
34	1937	家政学部二類	二股みのり 松村悠紀子	学童の間食に現はれたる蔗糖摂取量
34	1937	家政学部二類	石川静子 山下宏子 吉田泰子	冷凍魚介類及びビ甲殻類融解二関スル組織学的研究
35	1938	家政学部一類	久城和子 伊藤かをる	統計上よりみたる兒童の偏食状態について
35	1938	家政学部一類	須賀萬亀	國民の体位向上と栄養其他若干問題に就きて
35	1938	家政学部二類	穴戸勝子 新岡芳子 宝塚成	家庭に於ける合理的年中行事

回生	卒業年	学部 学科	氏名	論 題
35	1938	家政学部二類	反町たい	メダカの体色遺伝に関する実験
35	1938	家政学部二類	福原きよ	乾燥野菜について
36	1939	家政学部一類	今泉磨須子 若賀瑞子 藤山隆子	児童の砂糖摂取量と体格の関係
36	1939	家政学部一類	大島綾子	児童の食餌に就て
36	1939	家政学部一類	筑紫輝子	肺結核の食餌法について
36	1939	家政学部二類	安達静子 村岡セツ子 河島一枝	食(畜産)の生産、消費、輸出輸入の関係 及びこれが対策
36	1939	家政学部二類	楠岡久子 鱈ヨシ	小額所得者階級を基礎として国民体位向上に関する 栄養改善研究
36	1939	家政学部二類	鈴木セイ子 田端あさ子 中込敏子 村松愛子 宮澤敬子	非常時における水産業について
36	1939	家政学部二類	安田初江 宣春美智子 尾形キミ子	廃棄食品の利用と食品保存に就いて(其ノ一)
37	1940	家政学部二類	岡本富美子 加藤国子	ビタミン発達の歴史
37	1940	家政学部二類	片岡フサエ	糖尿病一般食餌療法
37	1940	家政学部二類	崎山雅子 佐々木多枝子 西田和歌子 野本ユキ	創立当時より現代に到る本校学生の体格の変遷
37	1940	家政学部二類	田口喜久枝 田里安	本校生徒の体格標準及び必需熱量について
37	1940	家政学部二類	東恩納和代 福山静	学校給食の一考察(豊明小学校給食施設について)
38	1941 (3月)	家政学部一類	黒川友子 三浦六花子	我が国に於ける食品としての水産製造品
38	1941	家政学部一類	椎木みち子 清水愛子	年中行事に於ける食物に就いて
38	1941	家政学部一類	鈴木まさ	本校生徒の体格標準及び必要熱量について
38	1941	家政学部一類 家政学部三類	梁祐錫(一) 朴姪淳(三)	朝鮮ノ唐辛子ニ就テ
38	1941	家政学部二類	赤枝枝実子	我国主食糧生産と将来
38	1941	家政学部二類	新井春江	学童の間食に於ける砂糖摂取量
38	1941	家政学部二類	斉藤千鶴子 寺井アイ子 堀部清江 松田詮子	学校給食
38	1941	家政学部二類	斉藤斐子 松本美枝	国民食と寮舎食事調査との比較
38	1941	家政学部二類	竹田伸子	緑茶について
38	1941	家政学部二類	西方けい 堀林子 藤橋迪	大豆加工食品について
38	1941	家政学部二類	西山都女 毛利ミヤコ 山本和子	習慣食について
39	1941 (12月)	家政学部一類	市村朝子 巖谷美寿子 西原輝江	児童の間食に就いて

回生	卒業年	学部 学科	氏 名	論 題
39	1941	家政学部一類 家政学部二類	川井晶子(二) 榑原幸(二) 藤原年子(一) 島村百子(一) 鈴木實枝子(一)	歴史ニアラハレタル家庭教育ノ概観
39	1941	家政学部二類	稲村美智子 牛尾浅子 菅原コト	調査表による食用雑草
39	1941	家政学部二類	今村民子 榎本和子 重松和子 坪田美恵 宮村セツ	冷凍鯨の組織学的研究
39	1941	家政学部二類	岩岡美代 大場和子 高橋節子 中村草代	国民食ノ検討
39	1941	家政学部二類	大矢直子 西原哲子	市販パント自家製パントノ栄養価値ノ比較
39	1941	家政学部二類	片岡房子 和田多恵子	主食(市販米・高粱)の栄養価について
39	1941	家政学部二類	志村順子 藤本スミ子 山口美也子	新興食糧麵米及び穀の栄養価値並に其の利用
39	1941	家政学部二類	高橋はる子 植田治代	七分搗米と七分搗米を生大豆粉にて補足した場合の 栄養価値の比較に就て
39	1941	家政学部二類	陳泰子 中島道子 馬場孝子	日本食器及び食物の生活文化的考察
40	1942 (9月)	家政学部一類 家政学部二類	澤村良子(一) 中村ふじ子(一) 落登志子(二) 近藤ミチノ(二) 二木武子(二)	食物調査
40	1942	家政学部一類 家政学部二類	福井鏡子(一) 山岡信子(一) 桑原文栄(二) 幸前哲子(二) 濱田トキ子(二) 森こま子(二)	家訓と自叙伝にあらはれたる武士の躰の実態
40	1942	家政学部二類	右江つた子 大橋忍み 谷垣伊津	世界に於ける鱈の漁獲とその利用
40	1942	家政学部二類	関康子 李仁喜 長山美代子 二木勝子	内地及び朝鮮に於ける鱈の漁獲及び其の利用
40	1942	家政学部二類	堀田行子	ビタミンB1の研究
41	1943 (9月)	家政学部一類	荒川絢子	家庭の内的構築とそれの及ぼす影響について
41	1943	家政学部一類	長野八須子	日本婦道の一考察
41	1943	家政学部一類	星原紀子	満州に於ける野菜貯蔵と野草料理等
41	1943	家政学部一類	山本幸枝 山村富美 柳次男 山田紀代子 金澤りやう 吉岡美智子	救荒植物とその調理法

回生	卒業年	学部 学科	氏 名	論 題
41	1943	家政学部一類 家政学部二類	氏家つや子(一) 三浦陽子(二)	食品の調理に依るビタミン B1 の減量
41	1943	家政学部二類	荒井和子 志村富子	病人食トシテノ玄米食並ニ玄米中ノビタミン B I 比色 定量
41	1943	家政学部二類	荒木光子 内野チト 白川宏江	玄米の炊き方並に燃料問題
41	1943	家政学部二類	上野すみ 上野ソノ子	現在ニ於ケル食糧問題 栄養問題 配給問題
41	1943	家政学部二類	佐々木都 鈴木信子 高橋ヨリ 田原屋敏子 藤井華子 波塚縫子	西生田寮生食餌記録
41	1943	家政学部二類	篠部泰子	孝道
41	1943	家政学部二類	園田千枝	歴史よりみた教育
41	1943	家政学部二類	月城南順(李南 順)	女子教育の理念(成瀬先生の思想より)
41	1943	家政学部二類	出木谷文枝 武井文江	戦時下学童ノ栄養
41	1943	家政学部二類	寺本公子	成瀬先生の婦人観
41	1943	家政学部二類	中村リツ 西垣禊子	母性の歴史的研究
41	1943	家政学部二類	正木久枝	武士道精神と婦道に就て
41	1943	家政学部二類	吉田美子	母の戦陣訓
41	1943	国文学部	国田百合子	女房詞の研究
43	1946 (3月)	家政学部二類	樋口泰	食事調査
43	1946	家政学部二類	山田ヨシエ	群馬県下の食用野草について
44	1947	家政学部一類	勝木政子 桂久子 藤木恒子 村上節子 山池和	膨し粉の研究
44	1947	家政学部一類	三浦園子	ネフローゼ食餌療法
44	1947	家政学部二類	近藤千鶴子 植林洋子 藤井敏子 横田芳子	食品の害虫
44・ 45	1947	家政学部二類 家政科保健科	吾妻美(44) 木下優子(44) 山口淑子(44) 芦澤英子 岡部康子 小林和子 小林経子 志村登志子 中村信子 柳野蓮子 渡邊至子	鯨肉食用化に関する研究 第一編
45	1947	家政科育児科	井上淑	私の体質
45	1947	家政科育児科	近藤静香	戦前から戦後に於ける学童の体格の変化に就いて

回生	卒業年	学部 学科	氏 名	論 題
45	1947	家政科保健科	衛藤京子 河原千鶴子 河野富美子 黒田信子 佐賀禎子 武安奈美 田中陽子 松縄昭子 山田澄子	調理加工並ニ貯蔵ニヨル食品ビタミンC含有量ノ変化 ニツイテ
45	1947	家政科保健科	江畑久子 木下光子 田窪恵美子 柴田リラ	膨張剤について
45	1947	家政科保健科	香川淳 竹沢昭 藤井昭子 山崎恭子	Diastaseの糖化力に及ぼす Tannin の影響に就て
45	1947	家政科保健科	加藤恭子 大和田道子	米、大麦、玉蜀黍の発芽時に於ける含水炭素の糖への 転流
45	1947	家政科保健科	鹿兒島照子 田中寿美子	農産製造学小実習
45	1947	家政科保健科	河村淑子	東京都区内街路樹葉ノ利用ニ就イテ及ビ粗蛋白質含有 量ニ就イテ
45	1947	家政科保健科	楠雅子 津田明子 玉井道子 山崎典子	現下の家庭経済
45	1947	家政科保健科	小出恵	食生活の科学化
45	1947	家政科保健科	郡珠子	腎臓病食餌療法
45	1947	家政科保健科	小坂藤乃子 福永房子	少女の宗教心についての研究
45	1947	家政科保健科	白井好子	粉食について
45	1947	家政科保健科	大徳きよ子 村治立	植物実験 蝸味噌
45	1947	家政科保健科	乗重郁子	酵母及ビタミンニトノ関係
45	1947	家政科保健科	浜本信子	鰯について
45	1947	家政科保健科	松高令子 土屋重	未利用果実を応用した食酢実験
45	1947	家政科保健科	山崎恭子 藤井昭子 竹沢昭 増田博子 香川淳	小麦粉麩を使用せる製パンに就て
45	1947	家政科保健科	和田正代	化学醤油ノ製造実験
45	1947	家政科管理科	新井秀子	環境と教育
45	1947	家政科管理科	長谷川玲 日向典子 藤田良枝 村岡鶴代 米原雅子	女子体育に関する思想史的考察
45	1947	家政科管理科	今井輝子 坂井敬子 田中節子 門馬昭子 吉川節子	最近に於ける東京都下一工場の勤労者生活の一面に就 いて
45	1947	家政科家政理科	伊藤富美子	自然研究
45	1947	家政科家政理科	清水瑠璃子	蟻蚕の生長に関する研究

回生	卒業年	学部 学科	氏 名	論 題
45	1947	家政科家政理科	遠山紀子	野草成分の研究
45	1947	家政科家政理科	松岡千鶴子 中村成子 名村美	蔬菜の研究 蒞菘草 甘藷
45	1947	家政科家政理科	水田和子	東京都立川農事試験場水田に於ける夏季プランクトンの分類学的研究
45	1947	家政科家政理科	矢部加寿子 内川富恵	肥料が人参の生育並びに体内成分に及ぼす影響に就て
45	1947	家政科家政理科	山田和子	幼児の心理と教育論
46	1948	家政科育児科	林春子 藤根吉	放線菌属の青黴に対する拮抗作用
46	1948	家政科管理科	笠原啓子	日本法制史にあらはれたる女性の地位とその社会的背景
46	1948	家政科管理科	倉田正子	婦人解放運動より観たる婦人と職業問題の思想的考察
46	1948	家政科管理科	前川明子	社会と音楽生活
46	1948	家政科管理科	前田雅子	思想的原因より見たフランス革命の教訓
46	1948	家政科管理科	丸山のみ子	将来の経済について
46	1948	家政科管理科	山口仁子	自律性教育
46	1948	家政科生活科	阿部良子 居谷ひつみ 大桶幸子 寺戸貞子 原成子 米満絹 池田豊子 石原恭子 大庭絢子 渡名喜郁子 村木敬子 山田栄子	乳業
46	1948	家政科生活科	家坂洋子 今井洋子 坂田和子	甘藷料理の際の温度と所謂冠水状態との関係について
46	1948	家政科生活科	石澤悦楽子 内田タエ 羽賀マサ子	腐敗甘藷の利用法
46	1948	家政科生活科	稲垣礼子 中村保子 星絢子	甘藷第一次加工並ニ澱粉粉糖化ニ関スル研究 附 実験試作報告
46	1948	家政科生活科	江原ハツ 大谷礼子 味村英子	外食券食堂ノ栄養調査
46	1948	家政科生活科	河原和子 福永永子 湯浅禧子	食品ノ簡易加工ト麹菌ノ利用ニ就テ
46	1948	家政科生活科	川村静子	醋酸醱酵及ビ特ニ醋酸醱酵ヲ利用スル發液ノ處分ニツイテ
46	1948	家政科生活科	国島百合子 井田幸江 岸裕子	水産栄養調味料の研究
46	1948	家政科生活科	佐藤喜美子	東北地方に於ける食用野草の研究
46	1948	家政科生活科	篠山和子	魚粉の食用化に関する研究
46	1948	家政科生活科	田中和子	人体解剖図
46	1948	家政科生活科	田辺千枝子 柳利 保井明子	現下ノ1国民食生活ノ実態ニ就イテノ一考察
46	1948	家政科生活科	松岡絢子	麩の顕微化学的観察

回生	卒業年	学部 学科	氏 名	論 題
46	1948	家政科生活科	松岡妙子 男澤淑子 住木玲子	英隠元のビタミンCに就て
46	1948	家政科家政理科	新井和子 武市衣恵	野菜の癒傷組織について
46	1948	家政科家政理科	猪狩禮子	双生児に関する文献
46	1948	家政科家政理科	市ノ瀬澄子 飯沢治子 川村欣子	植物のアクについて
46	1948	家政科家政理科	内田節子 稲葉幸子	ナデシコ科 特ニハコベ属ノ花卉ニツイテ
46	1948	家政科家政理科	小沢芳子	北武蔵ニ於ケル生物季節ノ研究
46	1948	家政科家政理科	佐々木すみ江 稲森貞子	葉菜類に於けるカロチノチドに就て
46	1948	家政科家政理科	中村みどり	植物細胞の生体染色と致死濃度の研究
46	1948	家政科家政理科	山田陽子 岩田佐紀子	山梨県増富鉱泉の鉄及カルシウムの定量
47	1950	家政科生活科学科	赤松弘子 小倉ヒデ子 森島寿子 鈴木洋子 奥野紀久子	食餌による狸々蠅の産卵数及寿命の変化
47	1950	家政科社会福祉科	荒木保子 横山和子	我国直接民主政治に於ける地方自治法とリコール制について
47	1950	家政科生活科学科	飯島和子 浅野登喜子	Sweet Potato Starch Gel
47	1950	家政科生活科学科	今村迪子 榊田迪子 三木和子 根岸達子 加藤道子 黒河内規子	食品中における塩分の定量
47	1950	家政科生活科学科	岩城太恵子 松本嘉枝	Fruit Jelly 形成の基礎的条件
47	1950	家政科生活科学科	上野都美子	北海道南瓜及び種子油について
47	1950	家政科生活科学科	奥田芳子	日本女子大学学寮ニ於ケル栄養調査
48	1951	家政科生活科学科	池田チヨ 上原千枝 小倉津江子	魚の味と栄養
48	1951	家政科生活科学科	今村マリ子 鷺澤久子	亜硫酸パルプ廃液及木材糖化液によるパン酵母の製造について
48	1951	家政科生活科学科	岩本和美 須藤さわ子 西澤京子 上松隆子 田中綾 西村操	パンの本質的改良に関する実験的研究—生地製法と酵母の質的関連について—
48	1951	家政科生活科学科	柿原紀久子 渡邊通子	生体内のカルシウムに就て
48	1951	家政科生活科学科	君島郁子 高橋千枝子 水野恵子	食品の灰汁抜きについて
48	1951	家政科生活科学科	嶋田操 村田明子	日本女子大学寮における栄養調査

回生	卒業年	学部 学科	氏 名	論 題
48	1951	家政科生活科学科	高橋智恵子	江戸時代に於ける食生活概観
48	1951	家政科生活科学科	千種洋子 杉山富子	魚肉の鮮度測定 主として色素還元法
48	1951	家政科生活科学科	平賀玲子 川手美枝	ビタミンC必要量に関する研究
新1	1951	家政学部 食物学科	大津常子 鎌塚直子 松島京子	患者給食・自由食 摂取状況表
新1	1951	家政学部 食物学科	坂本雅子 竹田京子 高木富美子 丹羽房枝	貯蔵穀物害虫の研究
新1	1951	家政学部 社会福祉学科	木村公子	中小炭鉱労働の実態
新1	1951	家政学部 社会福祉学科	深澤里子	イギリスの進む道—社会主義の構造をめぐって—
新1	1951	家政学部 家政理学科二部	青木康子	玉葱貯蔵の研究
新1	1951	家政学部 家政理学科二部	荒木和子	温州蜜柑の貯蔵に関する研究
新1	1951	家政学部 家政理学科二部	板橋瑞子	甘藷の葉齢と炭素同化能力についての研究
新1	1951	家政学部 家政理学科二部	一橋妙子 島崎ヤエ	群集の密度効果
新1	1951	家政学部 家政理学科二部	加藤節子 増井英子	冷凍食用蛙の筋肉の組織学的研究
新1	1951	家政学部 家政理学科二部	鎌田良枝	蝶蛹の発生実験
新1	1951	家政学部 家政理学科二部	川田典子	我が羊毛の将来
新1	1951	家政学部 家政理学科二部	定永淑子	野菜に附着せる寄生虫卵の研究
新1	1951	家政学部 家政理学科二部	武田静枝	蓴麻科の繊維植物に関する研究
新1	1951	家政学部 家政理学科二部	西垣芳子 三田慶子	発芽に関する研究
新3	1953	家政学部 児童学科	朝岡みち子 北沢敏子 田中桂子 田中智泉子 宗近妙子	女子の宗教に関する研究(一)(二)(別冊)
新3	1953	家政学部 家政理学科二部	池田典世	暗黒発芽種子と光 その発芽前後の種子成分の変化
新3	1953	家政学部 家政理学科二部	内藤美奈子	I 生長ホルモンに関する発根状態 II 植物性 plankton bacteria の増減関係 III 落葉前後の物質増減
新3	1953	家政学部 家政理学科二部	村松絹予	ユリ族の雌蕊の形態学的研究

現在このページはご覧いただけません。

未発表資料紹介

聞書き資料に見る学生生活

杉崎 友美



家政学部卒業アルバム(1912年)より

資料整理の過程で、原稿用紙一〇枚にわたる聞書き原稿が発見された。これは一九八四(昭和五九)年に桜楓会の創立八十周年を記念し刊行された『桜楓会八十年史』編纂に際し、一九二二(明治四五)年に家政学部を卒業した菊池すず枝氏(以下、敬称略)に、佐原芳子氏(家政学部第二類 一九四二(昭和一七)年卒業)と菊池多賀氏(家政学部第二類 一九四三(昭和一八)年卒業)が聞き取りを行

い、佐原氏がまとめたものである。

菊池すず枝は愛媛県から上京し一九〇四(明治三七)年に本校附属高等女学校に入学、一九〇九年四月に家政学部に入學した。一九〇四年六月に発行された『学報』第三号によると、この年の入学者数は研究科、本科、予科、高等女学校生徒を合わせて三八二名、そのうち高等女学校の一年生は五〇名であった。

菊池が在籍した九年間には、豊明図書館兼講堂(現在の成瀬記念講堂)や幼稚園・小学校校舎、三泉寮、香雪化学館等が建設され、本校が急成長した時代であった。校内の変化を身をもって体験した菊池が、学生生活について率直に語っている内容は興味深い。以下、資料の全文を紹介し、項目別に解説を加える。

〔資料〕

一、運動会のこと

- 。服装は着物に袴で一部の人が洋服だった。
- 。綱にぶらさがって渡る「お猿さん」という競技があった。

。自転車競技も一部の人がした。

。球竿体操があった。

。白井先生のピアノに合わせて体操をした。

。バスケットボールが呼び物だった。

。陸軍でなく海軍の軍楽隊をやった。

。大岡先生と藤原先生が校門の所で目をぐるぐるさせて男性を追いはらった。

。各寮でそれぞれお弁当を作って持って行った。

一、寮生活について

。「お主婦様」はあった。

。下駄箱の掃除などさせられた。

。寮と寮との交際会というのがあった。

。消灯時間はきまっていたが、遅くまで勉強する時は寮監先生にことわっていた。

。日曜日でもあまり外出はしなかった。

。たった一度だけ江の島に行ったのが楽しかった思い

出である。

。女学校の時は華山寮に入った。東京に叔父がいてこの時冷水摩擦を覚えた。従って十四才の時から昨年まで（九十二才）冷水摩擦を続けた。

一、学生々活について

。成瀬先生の実践倫理は長かった。二時間の時もあり三時間の時もあった。

。お作法は小笠原先生だった。小笠原先生のお宅にも行ったことがある。淀野先生は同回生だった。

。先生は東大の先生が多かった。

。丸の内の中央亭から料理のマナーを教えに来ていた。

。お料理は大岡先生、手塚先生に習った。

。藤原先生はなんでもやだった。

。附属女学校の五年生の時から国語は弘田先生に習った。弘田先生は大学とかけもちだった。

。女学校から大学まで九年間遠い（四国の伊予）親元を離れて学校に通ったのはつらくなかった。

。目白の学校が自分の我が家みたいだった。

。自分は理科が得意だった。

。一年二年の時英語は外人の先生がいた。

一、成瀬先生について

。学校ではきびしかったが、家ではとてもやさしかった。

。玉木先生が成瀬先生のお世話をしていた。

一、校友のこと

。大阪の藤田みつさん、岡山の橋本さんと今でも年賀状等文通しています。

一、その他

。たまに開かれた展覧会に家の模型を出品したことがある。

。催し物の際御臨席下さった宮様は理科室の二階にお出でになった。

。英語劇は当時もあった。

。早稲田の生徒は干し物を盗んだりするので泥棒扱いされた。

。四国から上京するのには神戸の西村旅館に一泊して行った。帰途も何処かで一泊しなければ帰られなかった。途中で台風に遭い難儀したこともあった。

あとがき

菊池鈴枝様（九回家政）にお伺い致しました。「佐原さんもっと早く来ればよかった」というお言葉が印象的でした。五十七年一月の大分支部新年会には御出席下さいましたが、これが最後に現在歩行も困難で、お言葉も聞き取りにくい状態でございます。お食事の時椅子にかけられる程度であれば横になっておいでで寝返りも思うにまかせられぬ御状態です。しかし桜楓会にかけられる情熱は素晴らしく、この事は桜楓会本部の方も、又現理事の西村章子様もよく御存じのことでございます。当日も寝てると話しくいとおっしゃって椅子にかけてお話し下さいました。御家族の方が、「おばあちゃん今日は目が輝いているね」とおっしゃる位桜楓会のことになると夢中で、御機嫌も良くなれます。本当にせめて一年早かったらもっともお話を伺えたと思います。

九月十七日

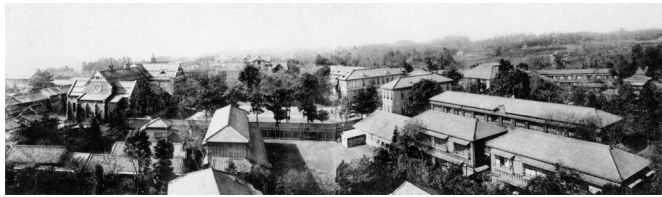
大分支部 佐原芳子（四十回家二）

*掲載に際し一部文字の修正等を行っています。

(1)運動会のこと

日本女子大学の運動会は、本校開校の一九〇一（明治三四）年から開催され、記念すべき第一回は創立委員の一人であった渋沢栄一の王子飛鳥山の別邸で行われた。二回目以降は目白の本校運動場で開催され、第三回には五千人、第四回には八千人の来場者を集めた。第¹四回秋季運動会では自転車、ホッケー、日本式バスケットボール等三二のプログラムが実施されたが、最も人気を博したのは日本式バスケットボールであった。この第²四回運動会で高等女学校一年生は風船競争という競技を行っており、菊池も参加したと思われる。

白井先生とは、本校創立時から一九四四（昭和一九）年まで体育の授業を担当し、運動会でも指導に当たった白井規矩郎のことである。白井は音楽取調掛所定学科（現東京藝術大学音楽学部³）を卒業した音楽教師であったが、音楽と動作を結び付けた「唱歌遊戯」を提唱、本校で体育教師となった。菊池すず枝と同年に国文学部を卒業した瀧本種子は、その著書「目白生活」（彩虹社一九一六年）に「白井規矩郎先生 創立以来唯一の体操の先生、ごく最近瑞典式が加はった外、私共の体操は皆先生の御考案である。音楽学校出身の先生は、朝から夕



菊池氏が在籍中の本校創立10周年頃の校内風景

まで体操場でピアノを弾いていらつしやる」と記している。体育は全学部の必修科目であり、菊池も白井の授業を受けたと考えられる。

運動会で藤原千代とともに男性を追い払ったとされる大岡葛枝は、一九〇五（明治三八）年に家政学部を卒業後、寮のまとめ役である寮監となり、一九一一年からは米国ミルズ・カレッジに留学し家政学を専攻した⁴。藤原千代は一九〇一年に国文学部に入學、翌年から豊明寮の寮監となり、卒業後は泉水寮、曙寮等の寮監や附属豊明小学校教員を務めた⁵。この運動会については、「女子大学評判記」に

「ウツカリすると観覧者は男子ばかりになって仕舞さうだから、学校でも考へて、若い男一切お断りと憲法を決めた。それでもノコノコ、御座る先生が毎年ザット一聯隊ばかりもあるとの事。片っ端から門前払ひを食はされて、

校長以下の不粹さ加減を怨み呪ひ、重き足を引きづつて帰り行く⁽⁶⁾と記されており、二人の苦勞がうかがえよう。

(2) 寮生活について

寮は、寮監一名の指導の下に寮生二〇名とお手伝いで家族を形成、寮生は整理、衛生、体育、風儀、交際、園芸、文芸係等、さまざまな係を受け持った⁽⁷⁾。主婦はこれら係を総括する立場にあり、大学の寮生が二名ずつ一ヶ月から二ヶ月にわたり順番に担当し、寮監を補佐した⁽⁸⁾。一九一一年頃の寮は普通寮二〇、折衷寮二、洋風寮一、少女寮一の合計二十四寮であり、寮規の下に自治生活が営まれていた⁽⁹⁾。

交際は、寮生が寮を相互に訪ね交流を図ると共に、他寮の寮風を学び良い点を取り入れ、自らの寮を改良する目的で行われていた。『目白生活』⁽¹⁰⁾では、瀧本自身が「銘仙のかさね」を着て「豆粒ばかりの緋のバラの花」を束髪に飾り、提灯をつけて責善寮を訪ねたこと、帰寮後に料理の味、会話の内容、お茶やお菓子について話し合う様子が描かれている⁽¹¹⁾。

華山寮は、創立委員の一人であった樺山資紀が、一九〇二年に寮舎二棟を邸内に建て、将来本校に寄付する約束で本校に貸与したものである⁽¹²⁾。現在の図書館の辺りに

位置し、華山寮の丘からは富士山が、眼下には早稲田大と大隈重信伯爵邸が望めたという⁽¹³⁾。

(3) 学生生活について

実践倫理とは、創立者成瀬仁蔵が社会学、婦人問題、労働問題等さまざまな社会問題を題材として取り上げた講義で、歴代の校長、学長に引き継がれた。第六代学長上代タノの頃から少しずつ変更され、現在では教養特別講義という名称で継続している本校の歴史ある授業の一つである。菊池が長かったと語る実践倫理について、後の第五代校長大橋広は「時間を超越して、三時間でも四時間でも五時間でもお説きになられた」と語り、また上代タノは「私の一ばん長かったのは七時間、実践倫理です。朝の十時から四時五時まで、ご飯も食べないでやったことがあります」と回想している⁽¹⁴⁾。当時の生徒から「実倫はもったいないが長すぎる」と言われていたように、非常に長い講義であった。

菊池が作法を学んだという小笠原清務は、女子の礼法についての教科書編集に携わる傍ら東京女子師範学校（後のお茶の水女子大学）等で教鞭を執り、本校では開校当初から「日本礼法」の授業を担当した⁽¹⁵⁾。また、本格的なフランス料理やテーブルマナーを教えたのは元華族

会館料理長渡辺鎌吉で、本学開校時の「西洋料理」の嘱託教官ミセス・ブラッドヘリーの後任として一九〇三（明治三六）年に迎えられ、以後一七年間講師を務めた。渡辺が〇七年に開いた中央亭は、後に宮内省御用達の店となっている。

手塚かね子は一九〇四年に家政学部を卒業後、〇九年から料理研究のため欧米を視察、一〇年春に帰国し教授となった⁽¹⁷⁾。弘田由己は一九〇四年に国文学部を卒業すると、普通予科・附属高等女学校の「国語」を担当し、一年からは大学部でも教鞭を執っていた。菊池が「東大の先生が多かった」と語っているように、教員の多くは東京帝国大学を始めとする有名大学の教授であったが、この聞き書き資料から卒業生が少しずつ教壇に立ち始めていく様子うかがうことができる。

菊池が得意とした「理科」は「応用理化」という科目で、東京帝国大学医学部薬学科教授で理学・薬学博士であった長井長義が担当していた⁽¹⁸⁾。また菊池が大学部一、二年の頃に英語や英文学を担当していたのはアズバン、グリーン、フィリップスの三人である。英文学部はもろろんのこと、家政学部、文学部、教育学部においても英語は必修科目であった。

(4) 成瀬先生について

成瀬は校内の北西に位置した校宅に（現在は成瀬記念館の隣に移築）、成瀬の新潟女学校時代（一八八七—一九〇）の教え子で、本校家政学部を卒業後、料理教授を務めていた玉木直とお手伝い⁽²¹⁾と共に三人で生活していた。

菊池と同じ家政学部九回生の小野玉枝は、一九一二年二月中旬に成瀬の自宅二階において一人ずつ成瀬と面会し、卒業後の進路等について簡単な質問を受けたと語っている⁽²²⁾。菊池も成瀬との面会をしたと思われる。

(5) その他

ここでは、英語劇と寮舎における泥棒について見ていきたい。

菊池が本校附属高等女学校に入学した一九〇四年は、六月に英文学部文学会が開催され、英文朗読、英語対話、演劇、活人画、幻灯等が、一月の高等女学校文学会では英和文章の朗読、対話、和歌披講、和洋奏楽、狂言、活人画等が行われている⁽²³⁾。〇六年七月には桜楓文芸会⁽²⁴⁾、秋には秋季文芸会⁽²⁵⁾が開催されており、菊池の在籍中には英語劇を始めとしたさまざまな行事が行われていた⁽²⁶⁾。

泥棒に関しては「女子大学寮舎の裏面」と題した次の

ような記事がある。⁽²⁾

ピリ／＼／＼と、何処やらの寮で吹く女生徒の鋭い
呼子の笛の音が、闇を劈いて聞えますと、校長先生
のお宅から各寮監室に通じたベルがリン／＼と鳴
る。…と、山の上の学監の御宅で叩き散らす金盞の
音が、ガンガラ／＼と気魂ましく響き渡ります。

さあ大変、泥棒がはいったと、蒼くなって狼狽へ騒
ぐ時分には、泥棒はさようならとも何とも言はずに
引上げた後（後略）

校長は成瀬仁蔵、学監は後に第二代校長となる麻生正
蔵である。記事にはさらに「女と侮ってか腹が立つほど
小馬鹿にして泥棒がやって来る」ともあり、女性のみの
寮には多くの苦勞があったことがうかがえる。

また金山寮で火災訓練が行われた際、事前に知らされ
ていなかった成瀬が本場の火事だと思い「洋剣を握って
顔色をかへて、金山が丘へ一目散―。読書によいかげん
無我になっていらした先生は、無我から無我の中へお
走りになった」という逸話が残されている。⁽³⁾ 泥棒や火事
等、成瀬の住居が校内にあったのにはさまざまな理由が
あったことが推し量られるのである。

以上、菊池不枝の聞き書きをもとに当時の学生生活を
紹介してきた。卒業生が実体験を語った資料は、正史と

は異なる視点から本校の歴史を明らかにしてくれる非常
に貴重な資料である。佐原芳子、菊池多賀両氏の仕事に
敬意を表するとともに、今後もこのような資料を紹介し
ていきたい。

（成瀬記念館学芸員 すぎとさき ゆみ）

(1) 『学報』第四号 一九〇四年一月二月

(2) 「第十六」風船競争（高等女学校一年）二十名宛二組に
分れ、紙の風船を打ちつ、決勝点に競ひ入るものなるが、
白の方落し、数少なかりしを以て勝と定りぬ。何をして
も可憐の感を起さしむるは、年の少き得分なり」（魔々
子「第四回秋季運動会と其批評」『学報』第四号 一九〇
四年二月）と記されている。

(3) 「日本女子大学校附属高等学校教職員調」（調査報告綴
込）一九〇三年一月

(4) 『日本女子大学学園事典』日本女子大学 二〇〇一年

(5) 『日本女子大学学園事典』日本女子大学 二〇〇一年

(6) 河岡潮風「女子大学評判記」（『冒険世界』一九〇八年）『復
録日本大雑誌・明治篇』流動出版 一九七九年

(7) 『日本女子大学校四拾年史』日本女子大学校 一九四二年
寮生数は、創立当初二〇名であったが、一〇年後には二

五名となった（『日本女子大学の過去現在及び将来』
日本女子大学校 一九二一年）。大岡薫枝『成瀬仁蔵先生』
（三月書房 一九六六年）によると、三〇名のときもあつ
たようで、大学の発展に伴い大きな寮舎が建設される
等、寮生数は時代により変化した。

(8) 『日本女子大学校四拾年史』日本女子大学校 一九四二年
瀧本種子『目白生活』彩虹社書房 一九一六年

(9) 『日本女子大学の過去現在及び将来』日本女子大学校
一九一一年

(10) 『日本女子大学校四拾年史』日本女子大学校 一九四二年

(11) 瀧本種子『目白生活』彩虹社書房 一九一六年

(12) 『学報』第一号 一九〇三年七月

(13) 瀧本種子『目白生活』彩虹社書房 一九一六年

(14) 『泉』第二卷第六号 一九五七年六月発行

(15) 『泉』第二卷第六号 一九五七年六月発行

(16) 『家庭週報』二四六号 一九一三年一月二四日発行

(17) 『教員認可開申二関スル綴』『日本女子大学学園事典』
日本女子大学 二〇〇一年

(18) 『日本女子大学学園事典』日本女子大学 二〇〇一年

『日本女子大学史資料集第五―(三) 日本女子大学校規則
明治四三―大正三年』日本女子大学成瀬記念館 二〇一

一年

(19) 『日本女子大学学園事典』日本女子大学 二〇〇一年

(20) 『日本女子大学史資料集第五―(三) 日本女子大学校規則

明治四三―大正三年』日本女子大学成瀬記念館 二〇一
一年

(21) お手伝いさんについて、井上秀は「おすえさんというお
ばさん。大阪時代の先生のおくさんのいらっしやる時代
からついていた人」とし、藤原千代は「創立当初幾年か
の間、お台所に、おすえさんという七十ばかりのおばあ
さんがいました。この人は新潟の田舎の産で、その昔先
生が新潟にお住居の頃から勤めしている」と語ってい
る（『泉』第二卷第六号 一九五七年六月発行）。

(22) 『泉』第二卷第六号 一九五七年六月発行

(23) 『学報』第四号 明治三七年二月

(24) 『家庭週報』六八号 一九〇六年七月一日発行

(25) 『家庭週報』八三号 一九〇六年一月二六日発行

(26) 瀧本は文芸会で「楠木正行自害の場」、英文科のリヤ王
等を楽しんだことを記している（瀧本種子『目白生活』
彩虹社書房 一九一六年）

(27) 夢浮橋「女子大学寮舎の裏面」（『婦人くらぶ』紫明社

一九一〇年七月発行）
(28) 瀧本種子『目白生活』彩虹社書房 一九一六年

『成瀬仁蔵著作集』に収録されなかった新資料を順次発表する。今回は講話二編である。

式日、始業式、終業式など行事の折の、また実践倫理の成瀬校長の講話を丹念に記録したノートが残されている。罫紙にカーボンはさんで浄書され、各々こよりで綴じられたノートには、成瀬自身による訂正、加筆の跡が残る。なお、

- 一、表記に関しては、片仮名書きの原文筆記を平仮名表記とし、明らかな誤字、脱字を改めるとともに、文字を統一した。
- 一、あて字については原文通りとした。
- 一、文意を明確にするため、句読点を必要な限り付した。
- 一、欄外に書かれていた註を、一部見出しとした。

成瀬仁蔵講話

1

大学部 計画発表会にて

— 大正三年九月十六日 —

十分あなた方の内にも経験を積み、外にも機会が多かった。今日は全世界の大勢から推して銘々で考へて、夫れ夫れ全体をよく纏めた計画を立て、夫れに対して又十分な決心を持って兎も角も自身で行かう、又共同

する事が大切であると云ふ事が分った。共同せんければ十分な効果が挙げられないと云ふ事もおわかりになったと思ふ。夫れで今日は銘々の深い意見を聞く機会はありませんが、之れが共同の働きに現る、計画の方面だけを

見る事が出来ました。私の銘々の教育及び全体の共同について大分考へて居る事がありますが、夫れは追々申すつもりである。併し夫れもわけて見れば二つになる。

I 一つは目に見えぬ所のものと、

II 一つは組織によつて外に現れる所のものである。

今日は生活が複雑になつて、殆んど繁に堪へぬ程であります。其の複雑なる生活を段々と單純に集中して行かると、やうな道を見出だして、益々夫れを完全に進めやうとして居ります。

夫れがあなた方の生活では係となつて居る。始めは段々多くなつて居りましたが、夫れを簡短にする必要があつて、今では係も五つとなり、従つて御報告なさる事も簡短明瞭になりました。之れは確に一つの進歩であります。

併し、唯だ係が減つて了う、報告が單純になつて了うと云ふ事が進歩ではなく、進歩には益々複雑と云ふ事が必要で、始終分化し益々複雑にならねばならぬ其の複雑なる生活をよく統一し、よく簡短に組織しなければならぬ。故に今日の事が確かに進歩したのであるかど一か、此の係の分け方が丁度適當であるかど一かと云ふ事は、よく考へて御覧になる必要があらうと思ひます。

私も、此の複雑なる生活を單純にし且つ有効にする事

に就いていろいろ研究も致し考へても居りますが、夫れは段々と申す事にして、あなたの方でも十分にお考へなさる事が大切であります。殊に其の効果を挙げると云ふ事、即ち木は実によりて知るべしと云ふ事の通りで、よき実を結ぶやうにしなければならぬ。今迄は其の木を培養すると云ふ事で沢山でありました。けれども今日では、今まであつた実では不十分である。今まであつたよりも少しよい木を作らねばならぬと云ふ事で、つまり、今日の生物学は今まであつたよりも一層よい木を拵へやうと云ふ事で、之れはバーバンクスと云ふ人のして居る事がよく証明して居るのであります。之れが今までは、下等動物、下等植物にのみ行はれて居つたが、今日では最も高尚なる人間にまでも及ぼされて来たのであります。其の科学が成り立つて、Eugenicsと言ふのであります。

そこで、我々はど一しても自分の必要なる又理想として居る如きよき実を得たい、よい結果を得たいと云ふ事を目的として居るのであります。そこで我々がよく改善して進むならば、終に其の結果を挙ぐる事が出来ると云ふ事が信ぜらるゝやうになりました。そこで我々がいろいろ改善して最もよい結果を挙げやうと努めるならば、必ず其の目的を達する事が出来ると云ふ確信が内に出来

て始めて、其の必要なる機関を見出だし、其の組織をも改善する事が出来るのであります。

そこで第一に、我々は如何にすべきであるか。我々は如何なる婦人とならねばならぬかと云ふ事でありませう。今御報告の中に、未だドーも我が国は世界列強の有様に比較しては、ドーも遜色がある。之れは残念な事ではないか。ドーしても我が国を文明諸国と同じ程度に達せしめねばならないと云ふ事である。斯う云ふ時に於て我が国が、日常色々な方面に研究的に又共同的に出来て居らないからである。独りさう云ふ事に困つて居るのは日本ばかりではない。戦争をして居る欧州諸国は皆さうである。必ずしも物質的方面のみならず、精神的に大に考へておかねばならない。

夫れから此間、学校の始まった頃にも申したのであります。只利己的ばかりではいけないと云ふ事。今我々が自覚が出来なくてはならぬ。個性と云ふものが益々発揮せられなくてはならぬ。我れに背かうとするもの、我れを滅ぼさうとするものに向つて、必ず之れに戦ひ勝つと云ふ力がなくては世に立つ事が出来ないものであります。今度安逸と戦ふやうになつたのは、或る国とは少しく感情を害したと云ふ事もある。之れがために日米關係と云ふものにも影響を来すかも知れぬ。若し我々が之

れを恐れて消極的に困難を避くると云ふ態度であるならば、到底進む事は出来ぬ。如何なる事があつても、我々は積極的に困難を排して立たねばならぬ。今度の事は我々も早晚ドーにかなつて来るだらうとは思つたものの、斯くの如く速かに来やうとは思はなかつた。然るに、早斯うなつて来たのを見れば、今後の変動は急転直下の勢ひで来るであらうと云ふ事を予想しなければならぬ。

夫れで先づ第一に、我が国の威信を高めねばならぬ。(空 白) 氏の書いた本の巻頭に、亜米利加合衆國の白人種は九千万で、印度人のあひの子でも一千万からあるのに、亜細亞人種は十五万人であると書いて居る。之れを以ても、亜米利加が軍備を増して日本人を排斥しやうとして居るのであります。然らば日本國の威信と云ふものはどれだけであらうか。深く考へて見なければならぬ。

我が知力、我が精神の力は一番何に現れるかと云ふと、我が身体に真つ先に現る、のであります。自分と云ふものは一番速く身体に現る、のである。私共が世界を歩いても、其処の学生の態度を見れば校風、国風と云ふものは大抵一見してわかるのであります。明日はシカゴ大学総長ジヤドソン氏、及び支那で総領事をして居りました Creene 氏などが見えます。此の人々が支那を見て日本

へ来て、どー感ずるでありませうか。詞はわからなくても、皆さんの様子によつて大概はわかるのであります。

我が国では百姓とか海女とか云ふものは体格も立派であります、学生となると誠にか弱さうに見える。併し外国へ行きますと、女学生と云ふものと他の婦人達と、体に於て少しも劣つて居りません。さうして髪結び方から着物の着ざまに至る迄一糸乱れずと云ふ有様で、誠に Bright である。私共が我が国の母をどの点からでも比べて御覧なさい。決して遜色はないと云ふ自信が出来て、外国の人々も夫れを認めて始めて我が国の威信が高まるのであります。如何にから威張りをしても実働がな

成瀬仁蔵講話 2

大学部第二、三学年にて

私は七月夏季休業に入る前に、我が国の女子の教育につきまして、桜楓会員並びにあなた方につきまして一つの問題を持って居りました。休暇中も成るべく夫れを研究して一つの解決をつけたいと思つて居りましたから、

くてはだめである。故に、どーしても私共が実を現さねばならぬと云ふ事になりました。

夫れで明日は外国の人々が見えて、ジャドソンと云ふ人は如何なる人格の人であるか、其の夫人はどー云ふ人物であるかと云ふ事をよく注意して見て貰ひたい。彼方の人も、深き注意を以てあなた方を見るのであります。私共はよその国民を学ぶ、又其の国民が如何なる理想を持ち、確信を持つて居るかと云ふ事を知らねばならぬ。又、私共が進んだ国の人々に劣らぬ者となり、又世界の文明に貢献するには如何なる事を学ばねばならぬかと云ふ考へを持つて方針を立てなければなりません。

— 大正三年九月二十三日 —

今日は稍其の解決をつけまして新しい方針を立て得るのであるけれども、夫れは大部分あなた方の中にある経験をも本として立てたものであります。故に初めにあなた方がどー見ておいでになるかを聞いて見る必要があります

す。あなた方はどー云ふ新しい方針をお立てになりましたか。又、今学期の集中点を如何にお立てになりましたか。初めに三年生に其の答へを求めたいと思ふのであります。

此の前に、実践倫理でとる問題をあなた方の最も必要と思ふ要求に対して取りたいと云ふ事を申しました。夫れに就いて未だ十分な答へを聞かないのであります。兎も角も今日は、実践倫理なり何なりの作業を最も必要な点から始めなければならぬのであります。

本校第二期発展に就きての努力

人間は始終幾らか気分の上り下りがありますが、夫れにはやはり何かの原因があるのである。私共は何時も桜楓会員に対し、学生に対して期待する事が多いのであります。之れ迄十年間には大きい波がうって、自分の信仰を動かさるゝと云ふやうな事がありました。然るに十年期を致しまして後、過去三年の間は第二の発展の準備を致しました。そして第二の種が發展をするには境遇が必要であると思ひまして、境遇を開く事に勉め、世界の大勢をも見て来る事が必要であると思つて外国をも回つて参り、幾らか境遇を開拓する事に勉めました。

然るに十分外の境遇を開く事も出来ず、内の自発力を

展ばす事も出来なかつたかのような感じが致しました。夫れを今日は、どー云ふ風に解決をつけたかと云ふ事を皆さんに申して見度いと思ひます。

十年期後の不完全に対する解決

私は斯う解決をして居るのである。之れはあなた方が秋におきめなされた信仰と一致したと考へます。私が桜楓会員に対する信仰は回復したのであります。今まで出来にくい出来にくいと言ふけれども、出来るのである。又、能力から言つても遺伝から言つても力あるものである。故に、信仰を回復したのであります。

併し其の信仰はあなた方の実力と云ふものを今迄見誤つて居つたかと云ふと、そーではない。今迄心配して居つた事が今日は少しもなくなつたかと云ふと、そーではない。けれども之れを物に譬へて言ふならば、病人があつて夫れは痼疾で今迄どーもはかばかしく治らなかつたのであるけれども、よく診察が出来て夫れを治す方法を見出したので、回復の見込みが立つたと云ふ訳であります。つまり我が国の婦人が決して外国婦人に劣つて居るのではなく、今日迄の生活の道が少し間違つて居つたと云ふやうな事から病氣になつて居つたのである。けれども今日では、健全になる事が出来る、確に力がある

と云ふ事がわかりました。

今学期の動き

此の期になつて、お客さんなり我々自身の見た処で何か動いて居るものがある。之れは表面のものではない。今迄でも互の力の働いた時には確に一つの働きが出来て、其のあとかたが今日も矢張り残つて居るのであります。夫れで今日、其の実体を感じして居ると言ふ事が出来るのであります。

過去の不満足は力の浪費にあり

確にあなた方には、も一層力を出す事、も一層発展する事の出来る能力を持つておいでになると思ひます。夫れが何故も一つ満足する様に発展する事が出来なかつたかと云ふと、確に之れ迄は力の浪費又は圧迫があつたと云ふ事である。其の浪費を取り除く事が出来たならば、其の生活の矛盾を除く事が出来たならば、銘々の力を遺憾なく發揮する事が出来る。必ず此処に見るべき活動を現す事が出来ると云ふ事は確に信ぜらるゝのであります。

夫れで私が今集中点を申す前に、あなた方の焦眉の急とも言ふべき要求とも言ふべき、つまりあなた方の根底

ともなるべき要求を満たす前に、必要条件がある。つまり其の病気を治す前に極手近い処から着手して行かねば、道が塞がつて進まれないと云ふ事があると思ふ。

私は今のあなた方の態度と元氣とは大に満足をして居るのであります。併し此の間から大に心にかけて居る事があります。夫れは其の組に限らないでありませうが、其処に一番現れたと思ふから代表して挙げねばならぬと思ふ。此処に一番浪費の大原因があるかと思ふ。

学問は長時間を費すべきものにあらず

此の頃、或る大学で斯う云ふ研究をしたのである。之れ迄余り勉強をし過ぎて身体を悪くしたり疲労をしたりして力を浪費すると思つて居つたのである。今、体格の一番悪いものは大学から出たものであると云ふ事であります。然るに今日では、Overworkは生活の間違つて居る為であると云ふ事であります。正しき生活をして居る学生が十五分間に十分仕遂げる事を、生活の間違つて居る学生は二時間か、つて未だ完全に出来る事が出来ないと云ふ。

故に学問と云ふものは、唯だ時間をかけたからと云つて本當の事が出来るものではない。如何に働いたかと云つても、其の力を浪費する様では効果は挙げられない

のであります。此処に原因がある。決してあなたの方は怠つては居らない。非常に勉強もし、非常に働きますけれども、其の生活を誤つて居てはだめであります。

浪費の徴候の現れの早きもの

此の浪費を計る標準がいろいろありますけれども、一番最初の見易いものは効力の減ずると云ふ事である。あなた方の毎日の働きに満足を感じずるならば浪費が少ないと云ふ事が言はるゝが、満足が出来ないならば浪費が多いと云ふ事を証するに足るのであります。

夫れから私は斯う思ふ。今日仰つた事は感情と云ふ事でありませんが、其の感情であっても其の他の力の浪費が起つて来ると云ふ事が一番何処にあるか。又、私共の生活の上で一番浪費して居る分量の多い処は何処にあるか。又、其の浪費が何処に一番先に現れて来るかと云ふと、先づ私は真つ先に身体の中に現れて来る、健康状態に直ぐ徴候が見えて来ると思ふ。身体の不健康なる生活から起る処の浪費が一番多くはあるまいかと思ふ。夫れで此の頃私が他の点については大分満足を致しますが、心にかゝるは身体の事である。此の中で最も弱い様に思ふのは英文科であります。之れは人数が少ないから目につくでもありませんが、又少ないから何時も惜しむ

のであります。之れに就いて直ぐ即断を下して、他の組よりもOverworkではないか、余り勉強を仕過ぎると云ふ事から来るのではないかと云ふ考へが出易いのである。

併し之れは、果してそゝでありませうか。之れは独り我が校のみならず帝國大学、高等学校、其の他総て我が国の学生の問題であり、特に私は御婦人の為に心配するのであります。さうして神経衰弱と云ふ事が多いのである。今日まで非常な学問をして居る学者は、悉く神経を疲らして居ないのである。故に、仕事を余計にするから神経を痛めると云ふ訳ではないのであります。働きさへすれば必ず能力は殖えるものである。つまり生活の仕方がわるいから、神経の使ひ方がわるいから起る事であると私は判断するのであります。

学生の發展、國民の發展は健康の増進にあり

故に学生を發展させやうと思ふならば、國民を發展させ様と思ふならば、先づ其の健康を増進しなければならぬ。そこで先づ第一に我々が考へねばならぬ問題は、如何にして此の病を治すべきか、如何にして此の病を除くべきかと云ふ事であります。

つまり病氣と云へば結核などもあります。肺や内臓に

結核がつくと云ふと、之れは外部からつくのであるけれども、其の原因は又、内にあるのである。故に、我々は其の原因を防ぐ事も出来るのであります。病氣の一番の原因は疲労であります。故に先づ初めに此の疲労と云ふ事、例へば今日などは暑いけれども、疲労しなければ身体がだるくなったり眠くなると云ふ様な事はなくてはならないのである。疲れた頭を以て物を考へても、本を読んでも効力が現れて来ないのである。故に私共はどーしても、疲労の原因を除くと云ふ事に勉めねばならぬ。今日から皆が銘々に行うて、之れが学校衛生に普及するやうにしなければなりません。

今日疲労は何処から来るか、其の疲労は如何にして防ぐ事が出来るかと云ふ事は大に研究が出来たのである。之れを詳しく申す時間もなければ必要ありませんが、疲労の原因は何であるかと云ふ事を知らねばならぬ。今まで、疲労とは細胞の實質が消費せらるゝ事である。故に夫れを回復する為に休養をしなければならぬと考へて居りました。夫れも一部の真理であるけれども、今日の最もよく実験した考へは、其の働いたり考へたりして使はれた炭酸瓦斯、又食品が消化しないで余ったり或は少し腐敗した部分が血液に入った時に、之れは肝臓の中へ入って精選されて心臓の方へ来れば健康状態である

が、其の二酸化炭素や雑物が血の中へ交つて来ると、直ぐ様疲労を感じ或は病氣を起すので、之れはダクターホッジ其の他の人々によつて証明せられた事であります。之れに食塩注射をすると直ぐ元氣を回復すると云ふ事もあつて、疲労若しくは病氣と血液とは非常に密接な関係があるのであります。

夫れから食品の消化がよくて、血液が清潔になつて内臓がよく動いて居るならば、確かに健康が増進するのである。之れは機械であつて、殆んど我々が意識を用いずに働いてくれるものであります。

併し一方には、我々が意志を以て始終此の働きを調節し、適當なる刺激を与へて行かねばならぬ。之れは氣分と云ふものが大切であります。感情と云ふものが、能力の上に非常なる関係をもつて居るのであります。私共が学問をしても、始終勇氣を以て勝に乗じて進軍する時の様な有様で勉強するならば、少し無理をしても、どんなに忙しくても決して疲れるものではありません。

今年の方針

然るに御婦人の生活と云ふものは、感情と云ふものが始終支配をして居るのであります。故に今年は斯う云ふ方針をとりたいと思ふ。夫れは人格の感化力を以て力を

つけると云ふ事があります。此の夏休みに読みました本の中に、人間の教育の上に感化力と云ふ事が非常に大切なものであると云ふ事が書いてありました。

新約全書と旧約全書の違い

宗教で言ふならば、旧約全書の教へと新約全書の人を救ふ方法と如何に違ふかと云ふと、旧約全書には憎む、罰、罪、怒り、嫉みと云ふ様な字が沢山ある。故に旧約全書を読むと神様は恐ろしいものと云ふ様な感じが起るのである。然るに新約全書には愛とか、自由とか、信仰とか、希望とか、熱とか、勇気とか云ふ文字が一番沢山使つてある。故に心に善い感じを与へて、之れに由つて感化して行くと云ふ事があります。

其の次に文学では、Wordsworthなどが挙げてありました教育にしても、唯罰とか先生の威厳とかで抑へつけるのではなく、感化力を以て人を改めさせると云ふ事が書いてあつたのである。

人にしても、温い熱のある親切なる人格であるならば、何時もそゝ云ふ詞が多く出るので、其の反対の人ならば、又きつと反対の詞が出るのであります。

故に私共は自分にも人にも善い感化、善い暗示を与へて、暗示によって教育して行くと云ふ事に重きを置くと

云ふ事が大切であります。之れは浪費と云ふ事について原因を除くと云ふ事は、先づ第一に致さなければなりません。

私共は浪費に妨げられて居つて、其の為にどうしても満足なる生活が出来なかつたと云ふ事が事実であります。故に私共は、先づ身体から精神生活の教訓を受くると云ふ事が大切である。そこで私共は機械的に又精神的に浪費の原因を除いて、人格の温い感化に由つて銘々の力が十分に発展する様な生活を致さねばならぬと考へます。



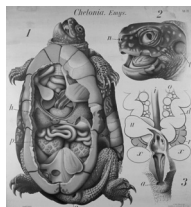
展示の記録（二〇一九年度）

●成瀬記念館（目白）

日本女子大学の授業

前期
4.9(火)~27(土)
後期
6.25(火)~8.1(木)

日本女子大学では一九〇一（明治三四）年に開校して以来、さまざまな授業が行われてきた。本展では展示期間を前後期にわけ、



解剖図 左:カメ 右:ドバト

前期は理学部と家政学部、後期は国文学部と英文学部の史料を紹介した。まず前後期を通じて、壁面には明治末期から理科教育の教材として使用されていた解剖図を展示した。解剖

図二枚のうち、ヒトデ・カメ・ドバトの三枚を紹介した。

この解剖図は、一九〇八（明治四一）年から一九一二年にかけて、教育学部で教鞭を執った高倉卯三磨教授の動物実験の授業で使用された様子が写真に残されている。

そのほか前期の展示では、一九〇六（明治三九）年に教育学部第二部の備品として購入されたライツ社製（ドイツ）の顕微鏡、師範家政学部の学生が授業で制作した綿入れ、袴等の和裁提出物やバッグ等を展示した。また後期の展示では、国文学部一回生の教科書、英文学部の卒業論文、英文学部が上演していたシェイクスピア劇のパシフレット等を紹介した。

没後一〇〇年記念
成瀬仁蔵書簡展

前期
9.20(金)~10.20(日)
後期
11.5(火)~12.20(金)

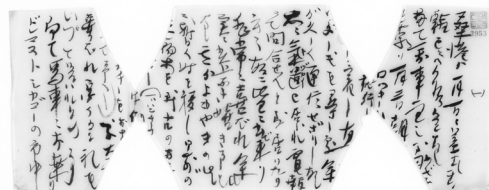
本学創立者成瀬仁蔵は一九一九（大正八）年に亡くなった。本年が成瀬没後一〇〇年にあたるのを記念し、書簡展を開催した。

成瀬記念館には、成瀬の発信・受信書簡

約三二〇点が保管されており、そのうち発信書簡は約三六〇点である。これらの書簡の多くは成瀬の死後、関係者や卒業生により本学に寄贈され、成瀬記念館分館（旧成瀬仁蔵住宅）や図書館等で整理・保管された。そして当館開館と同時に移管されたものである。

本展では成瀬の発信書簡を中心に展示した。展示期間を前期と後期にわけ、前期は成瀬の志を継ぎ第二代校長となった麻生正蔵や本学設立に関わった山県有朋、土蔵庄三郎等の書簡を、後期は最愛の妻マスイエや卒業生に宛てた書簡を中心に紹介した。

また、前期途中からは成瀬の妻マスイエの実家である服部家に関わる資料を展示し、成瀬と服部家との関わりを紹介した。



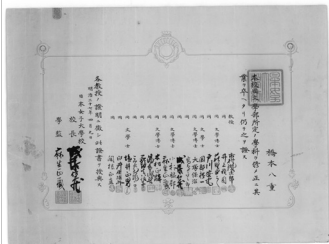
1891年1月11日 成瀬マスエ宛成瀬仁蔵書簡

卒業展

2020.
1.14(火)
~3.4(水)

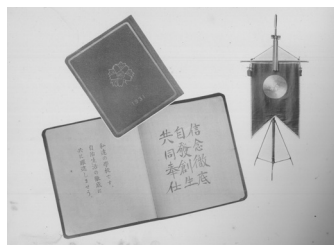
卒業論文、卒業証書、卒業アルバムなどの資料から、女子大学の歩みを辿る展示。

戦時中の卒業論文は食料危機に関するものが散見され、戦後は戦後民主主義下ならではのテーマが登場する。学生の問題意識が反映される論文は、成瀬の教育理念が時代のなかでどのように展開していったのかわかることができる資料だ。また、かつて卒業証書は一枚一枚手書きで書かれ、指導した教授らが自筆で署名した。



国文学部 第1回生 卒業証書(1904年4月9日)

卒業は今以上に貴重なことだった。第一回生の卒業式は一九〇四年四月に行われ、西園寺公望は祝辞で「我東洋に於いて正式に高等なる学科を



「学生ハンドブック」と「校旗」(1932年)
第29回生 卒業アルバムより

修めて得たる女子を出した第一日」と述べている。総勢二二人の入学者のうち卒業した者は一二一人。当時は結婚などの理由で退学する学生が少

なくなく、「醜婦保護所」「目白の姥捨山」といった中傷もあった。卒業生総代は、「あれ吾等が行くところ、姉ともたのむ先輩ありて、荊を刈り道をひらきて待ち迎ふるにあらず、おもへばかなしくこころ細き初旅なりや」と謝辞を残している。

●西生田記念室

シリーズ「天職に生きる」

—日本女子大学家政学部のあゆみ展

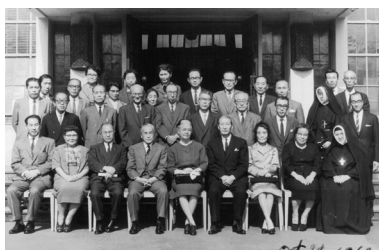
あゆみ展

4.9(火)
~5.17(金)

成瀬は著書『女子教育』において、家庭で

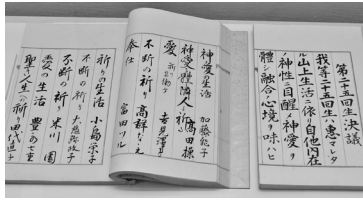
大きな役割を担う女子が「家政学を研究し家政に必要な智識と経験とを積む」ことが大切であると説いている。

その成瀬から家政学の未来を託されたのが、一九〇一(明治三四)年に本校家政学部一回生として入学した井上秀であった。井上は成瀬の期待に応えるべくアメリカで家政学や栄養学等を学び、帰国後は本校教授として家政学の発展に尽力した。その努力が実を結び、一九四八年(昭和二三)年三月、本学は念願の大学昇格を果たしたのである。



中央にルル・ホームズ 1963年10月22日撮影

本展では『女子教育』や成瀬が井上に宛てた書簡、女子大学設立に努めたルル・ホームズの写真等を展示した。また一九四九年に発足した日本家政学会関係資料も紹介した。



宣誓署名帳【誓言】1924年 右：【決議文】1927年

◇軽井沢夏季寮の生活
—先輩たちのレポート—

5.28(火)
~8.1(木)

一九〇六年に開寮した「三泉寮」のシリーズ展示。学生によるレポート・手記・手紙などで夏季寮生活の変遷を辿った。成瀬は集う目的を「精神的空気を作る」ためとした。

戦前は二、三週間の長期修養会が行われ、潜心会・瞑想会・誓言会・結論会・個人面接などが設けられた。二五回生の宣誓署名帳には、「愛」や「祈」という言葉が多くみられ、「決議文」には「自他内在の神性に目醒め神愛を体し融合の心境を味わい」とある。また、手記からは軽井沢を「霊地」や「聖地」と呼んでいたことがわかった。

一方、戦後は教養特別講義としてカリキュラムに組み込まれ、日程も縮小された。課題図書が設定され、デイスカッシュ

ンとレポート提出が求められるなど、自身や社会と向き合う場として受け継がれた。

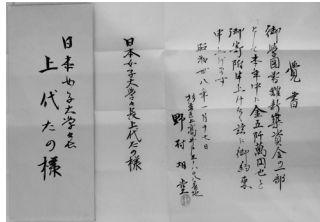
日本女子大学図書館—
“VERTAS VIA VITAE”は永遠に

9.27(金)
~12.20(金)

本校の本格的な図書館の始まりは、一九〇六年(明治三九)に

森村豊明会の援助により建設された総煉瓦造りの豊明図書館であった。しかし関東大震災により豊明図書館は甚大な被害を蒙り、以後本校の図書館機能は校内を転々とすることになる。

その後、図書館建設の声をあげたのは、第六代学長上代タノであった。成瀬の教えを受けた上代は早くから図書館の重要性を認識しており、図書館建設に尽力した。一九六四(昭和三九)年に完成した図書館は五



上代タノ宛野村胡堂書簡 1963年1月17日

五年にわたり多くの学生に愛されたが、二〇一九(平成三〇)年三月にその歴史に幕を下ろした。

本展では、図書館建設にあたり上代が助言を仰いだミスター・メトカフ、当時英文学科教授で上代の友人でもあったロザモンド・クラークとの書簡、建設資金を寄附した野村胡堂の妻で上代の親友でもある野村はなの書簡等を紹介した。

日本女子大学のおひなさま

2020.
1.21(火)
~3.3(火)

恒例の「おひなさま展」では、かつて本学の学寮や卒業生宅等で飾られた、明治、大正、昭和の雛人形を展示した。

今年度は、二〇一九年三月末に閉寮した

楓寮から
寄贈されたおひなさまを紹介した。



おひなさま展ポスター

二〇一九年度活動の記録

- | | | | |
|---|--|--|--|
| | 10名見学 | | |
| 4・1 「新任教員の集い」参加者見学、主事説明 | 5・10 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 4名、教員1名見学、説明 | め特別開館、見学者144名、分館200名見学 | |
| 4・2 西生田記念室、大学入学式につき開室、見学者60名 | 5・11 泉会定時総会、85名見学 | 6・12 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 5名見学、説明 | |
| 4・6 (土) 大塚警察署にて銃砲一斉検査 | 5・16 オープンキャンパスの学生スタッフ29名見学 | 6・15 (土) 西生田記念室、附属中学校オープンスクールのため特別開室、見学者5名 | |
| 4・9 展示オープン(目白・西生田) | 5・17 展示終了(西生田) | 6・17 成瀬記念館運営委員会(本年度第1回) | |
| 4・17 福井県ふるさと文学館、山川登美子の資料返却 | 5・18 (土) 服飾文化学会総会、15名見学(分館も)。桜楓会品川支部、9名分館見学 | 6・18 生涯学習センターにて講座担当岸本 | |
| 4・18 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 72名、教員6名見学、説明 | 5・20 Preservation Technologies Japan 脱酸のため資料点検及び搬出作業(9/17納品) | 6・20 『成瀬仁蔵関係書簡集1』(1000部) 納品 | |
| 4・19 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 73名、教員4名見学、説明。建築史学会13名、分館見学 | 5・24 附属中学校1年生墓参246名、教員12名見学(分館も)。 | 6・21 職員基本研修(キャリアデザイン研修)(岸本) | |
| 4・20 西生田記念室、創立記念式典につき開室、見学者30名 | 5・27 燻蒸のため資料搬出(5/31搬入) | 6・22 創立者成瀬仁蔵生誕記念日、図書館・青蘭館落成式のため延長開館7名見学 | |
| 4・26 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 25名、教員2名見学、説明 | 5・28 展示オープン(西生田) | 6・24 2019年度全体研修(基本研修)(岸本・杉崎) | |
| 4・27 前期展示終了(目白) | 5・30 授業(伊藤先生)で分館22名見学。全国大学史資料協議会東日本部総会に参加(岸本・杉崎 於東京経済大学) | 6・25 展示後期オープン(目白) | |
| 5・8 桜楓会成瀬仁蔵研究会にて報告(大橋) | 6・7 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校) 41名、教員6名見学、説明 | 6・27 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 6名、教員1名見学、説明 | |
| 5・9 授業(葉袋先生)で記念館、分館 | 6・8 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 4名、教員1名自由見学 | 6・28 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 10名、教員1名見学、説明 | |
| | 6・9 (日) 「オープンキャンパス」のた | | |

- 6・29 書庫のキャビネの上位に資料整理用の棚を設置
- 7・4 第111回全国大学史資料協議会 東日本部会研究会に参加(杉崎 於平和記念展示資料館)
- 7・5 東京光音、デジタル化のため資料引き取り(8/20納品)
- 7・8 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 23名、教員3名見学、説明
- 7・10 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 11名見学、説明
- 7・11 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 82名、教員6名見学、説明
- 7・12 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 39名、教員1名見学、説明。私大連金曜会7月例会、57名見学、説明(分館も)
- 7・16 『成瀬記念館2019 No.34』(2000部) 納品
- 7・17 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 23名、教員2名見学、説明。文京区立森鷗外記念館より資料返却(3/28貸出)
- 7・18 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 7名、教員1名見学、説明。
- 本日午後3時過ぎから停電のため閉館。
- 7・29 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 23名、教員2名見学、説明。新作分館絵葉書(4000枚)、クリアファイル(1000枚) 納品
- 7・31 通信教育課程の学生1名、通信教育課の職員1名付添いで見学(分館も)
- 8・2 本年度当館受入れ予定の博物館実習生6名に事前指導
- 8・3 (日)「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者206名、分館83名見学。実習日数不足の博物館実習生4名、1日のみ受入れ
- 8・4 (日)「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者177名、分館81名見学。実習日数不足の博物館実習生3名、1日のみ受入れ
- 8・21 優良防火対象物認定のための自衛消防隊訓練
- 8・27/9・3 博物館実習(日本文学科1名、史学科1名、現代社会学科1名、心理学科1名、文化学科1名)
- 8・30 神奈川大学資料室6名見学、説明(分館も)
- 9・7 (土) 附属豊明幼稚園入園志願者説明会・附属中高説明会につき特別開館、見学者255名
- 9・15 (日)「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者231名、分館139名見学
- 9・17 聖学院大学職員7名、分館見学、説明。「写真で見える成瀬仁蔵その生涯」納品(5000部)
- 9・18 附属中学校3年生有志60名、教員4名 分館見学
- 9・20 展示オープン(目白)
- 9・28 東京建築士会日本女子大学図書館・青蘭館(学生滞在スペース) 見学会にて分館公開
- 10・3 附属中学校PTA(総務部)「日白キャンパスめぐり」の下見のため18名見学、説明(分館も)
- 10・5(土)〜6(日) 西生田記念室、十月祭につき特別開室、見学者合計43名
- 10・9 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校) 36名、教員3名見学、説明
- 10・16/18 全国大学史資料協議会2019年度総会ならびに全国研究会に参加(岸本・杉崎、於立教学院)。同全国研究会にて報告(岸本)
- 9・7 (土) 附属豊明幼稚園入園志願者説明

- 10・16 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）39名、教員1名見学、説明
- 10・17 附属中学校PTA「目白キャンパスめぐり」100名見学（分館も）
- 10・18 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）36名、教員1名見学、説明。全国大学史資料協議会全国研究会見学会にて52名見学（分館・講堂も）
- 10・19（土）～20（日）目白祭につき平常通り開館、見学者合計570名、分館367名。西生田記念室、日女祭につき平常通り開室、見学者合計42名
- 10・20 展示（前期）終了（目白）
- 10・24 大学基準協会8名見学、説明
- 10・26（土）～27（日）西生田記念室、もみじ祭につき特別開室、見学者合計22名
- 10・30 家政学部住居学科の授業「基礎製図Ⅱ」（是澤先生）の履修生96名、教員6名見学
- 11・1 筑波大学教員による石橋和訓作「渋沢栄一像」（法人会議室）調査立合
- 11・5 展示（後期）オープン
- 11・7 防災訓練。2019年度職員研修（DocuWorks9基本講習会）参加（岸本・杉崎）。男性用トイレ修理完了
- 11・8 入学課から依頼の大学見学の高校生（2校）34名、教員3名見学、説明
- 11・9 新制29回生・通信27回生「卒業40周年を祝う会」にて講演（是恒）
- 11・11 本学への爆破予告のため午後3時以降キャンパス内立ち入り禁止
- 11・13 文京ミュージズフェスタのため打合せ（岸本、於文京シビックセンター）
- 11・19 旧図書館の「定礎」移管される。中島邦名誉教授より成瀬仁蔵および本学学園史関係の蔵書の寄贈を受ける
- 11・21 「成瀬記念館利用案内」納品（2000部）
- 11・26 入学課から依頼の大学見学の高校生（2校）31名、教員2名見学、説明
- 11・27 入学課から依頼の大学見学の高校生（2校）12名、教員1名見学、説明。東京修復保存センター、修復のため資料搬出（1/30返却）。国立女性教育会館「アーカイブ保存修復研修」にて報告（岸本）。同館研修に3日間参加（是恒）
- 11・29 人事課より依頼の日本体育大学令和元年度SD研修「大学訪問研修」の11名見学、説明（分館も）
- 12・3 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）16名、教員1名見学、説明
- 12・6 西生田成瀬講堂運用委員会に出席（岸本）
- 12・7（土）「入試相談会」のため延長開館、見学者58名
- 12・13 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）21名見学、説明
- 12・19 文京ミュージズフェスタ2019（於文京シビックセンター）に参加
- 12・20 キャリア支援課から依頼の同志社女子大学の教員3名見学、説明。展示終了（目白・西生田）
- 1・8 「墓参のしおり」納品（3000部）
- 1・10 『実践倫理講話筆記 大正二年度ノ部』納品（1000部）
- 1・14 展示オープン（目白）
- 1・21 展示オープン（西生田）
- 1・25（土）西生田記念室、附属豊明小学校音楽会（於西生田成瀬講堂）につき特別開室、見学者34名
- 1・28 小石川消防署、分館査察
- 2・1～3 入試期間中11時より14時の間、受験生付添者見学につき特別開館、見学者合計54名
- 2・13 展示のため神奈川県立歴史博物館

に資料貸出し（返却は来年度）

2・15 西生田記念室、附属中学校新入生保護者会のため特別開室、見学者17名

2・17 成瀬記念館運営委員会（本年度第2回）

2・18 防災管理定期点検。エレコン点検

2・19 新型コロナウイルス対策のためアルコール消毒剤設置

2・27 附属豊明小学校6年生36名、「卒業展」見学。28日見学予定の2クラスと3月11日見学予定の5年生3クラスは中止

3・3 展示終了（西生田）。妹島和世事務所に展示挨拶・打合せ（主事・岸本）

3・4 展示終了（目白）。創立者命日につき特別開館、見学者1名

3・6 『日本女子大学史資料集第五（八）日本女子大学校規則（昭和六年一月一日昭和九年）』納品（150部）

3・12 120周年記念出版第一回打合せ

3・13 会議室にアルバム整理用書架設置

3・19 消防設備点検

二〇一九年度の成瀬記念館運営委員

大場昌子館長（学長）、丸山千寿子家政

学部長、高野晴代文学部長／成瀬記念館担当理事、小山聡子人間社会学部長／附属中・高担当理事、奥村幸子理学部長、定行まり子家政学部通信教育課程長、土屋智子教養特別講義1委員会委員長、藤井雅子教養特別講義2委員会委員長、臼杵陽図書館長、多屋淑子総合研究所所長、大沢真知子現代女性キャリア研究所所長、坂本清恵生涯学習センター所長、蟻川芳子（一社）日本女子大学教育文化振興桜楓会理事長、古川元也成瀬記念館主事

二〇一九年度成瀬記念館構成メンバー

館長：大場昌子、主事：古川元也、館員：岸本美香子（主任）、杉崎友美、非常勤：大門泰子、大橋有希子、加藤きよみ、小林芳子、是恒香琳、宮内量子、山本文子

博物館実習

2019年度の博物館実習（第30回）は、8月27日（火）から9月3日（火）までの6日間の日程で行った。実習生は日本文学科1名、史学科1名、現代社会学科1名、心理学科1名、文化学科2名。

雑司ヶ谷霊園と雑司が谷旧宣教師館、成瀬記念講堂と成瀬記念館分館を見学。併せて、成瀬記念館の収蔵資料や活動状況について説明を受けた。

企画展「没後100年記念 成瀬仁蔵書簡展」の準備に参加し、成瀬仁蔵と妻マスエ、麻生正蔵、玉木直、仁科節、前神醇一を紹介するパネルを一人一枚作成した。このほか、西生田記念室では西生田キャンパスの歴史を学ぶとともに、企画展「日本女子大学図書館―“VERITAS VIA VITAE”は永遠に」展の展示作業を体験した。

また、この6名とは別に他機関で博物館実習を行った学生のうち、実習期間が一日不足している学生7名を受け入れた。8月3・4日のオープンキャンパスで成瀬記念館と成瀬記念館分館の説明を行った後、分館の受付業務を担当した。

業務統計

開館日数 目白 155日

西生田 142日

分館 32日

入館者数 目白 5732人

西生田 1457人

分館 1799人

学園史関係質問受付および資料提供

206件

出版・映像のための資料提供

11件

(広報課扱い含む)

その他

○『成瀬記念館2019 No.34』の発行

2千部

○『写真で見る成瀬仁蔵その生涯』の増

刷 5千部

○『成瀬仁蔵関係書簡集1』刊行 1千部

○成瀬記念館利用案内の増刷 2千部

○『実践倫理講話筆記 大正二年度ノ部』

の発行 100部

○『日本女子大学史資料集 第五(八) 日

本女子大学校規則(昭和六年二月)

昭和九年』の発行 150部

○研修等参加(研究会:全国大学史資料協

議会東日本部会2019年度総会、全国

大学史資料協議会2019年度総会なら

びに全国研究会に参加 その他:文京

ミュージズネット、展示見学など)

○資料の収集・整理・保存・媒体変換

二〇一九年度展示一覧

〔成瀬記念館〕

4・9〜27 6・25〜8・1 8/8・15・22

日本女子大学の授業展

9・20〜10・20 11・5〜12・20

没後100年記念 成瀬仁蔵書簡展

1・14〜3・4

卒業展

〔西生田記念室〕

4・9〜5・17

シリーズ「天職に生きる」

―日本女子大学家政学部のみゆみ

5・28〜8・1

軽井沢夏季寮の生活

―先輩たちのレポート

9・27〜12・20

日本女子大学図書館

―“VERITAS VIA VITAE”は永遠に

1・21〜3・3

日本女子大学のおひなさま展

■成瀬記念館より

本年一月に開催された、企画展示「卒業展」には、多くの卒業論文が展示されました。本学は、一九〇四年四月九日に第一回生の卒業式を行いました。展示ではこの時の卒業証書をはじめ、ゆかりの作品が陳列されました。なかでも、毛筆や万年筆で丁寧に、しかもびっしりと記された、分厚い卒業論文は圧巻でした。見る者に、学びの集大成として、学生が卒業論文にかけた情熱や時間が伝わってきます。

本号には、展示準備から生まれた大門泰子さんの論文「日本女子大学の卒業論文―学びの集大成からみる学園史」も所収されています。記念館に蓄積される本学の資料を、丹念に整理、配架、調査、研究し、それが本学の歴史を深く知るための展示へとつながり、論文へと結実しました。期を同じくして、家政学部住居学科定行まり子先生も卒業論文に着目され、当時の教育の在り方を調査されています。館蔵資料がこのような形でますます活用されるよう、願ってやみません。

(古川元也)

成瀬の没後一〇〇年と創立一二〇年という節目に挟まれた二〇二〇年、成瀬記念館は滞っていた資料整理やデータベースの構築を進める良い機会となるはずだった。新型コロナウイルスは卒業式や入学式の中止、授業開始の延期などあらゆる計画を白紙にしてしまった。この臨時休館を利用して古写真の整理を始めたい。(岸本)

成瀬が妻マスエに送った書簡を初めて見たとき、その内容と体裁に大変な衝撃を受けた。それ以後、いつかマスエ宛書簡を展示したいと思ってきたが、昨秋「成瀬仁蔵書簡展」でマスエ宛成瀬書簡一〇点を紹介することができた。積年の夢が叶ったわけだが、マスエ宛書簡は他に六〇点もある。第二弾の展示はいつできるのだろうか(杉崎) 二〇一九年四月に着任し、「軽井沢夏季寮の生活―先輩たちのレポート」「卒業展」を担当した。本学が守ってきた資料の貴重さと共に、保管や調査、展示の難しさを痛感した。経験の積み重ねがものをいう職人の世界だ。主事、主任、ベテランの先輩方をはじめ多くの方のご指導があったからこそ、駆け抜けることができた。

(是恒)

成瀬記念館 2020 No. 35

二〇二〇年八月六日

編集・発行

日本女子大学成瀬記念館

〒112-8681

東京都文京区目白台三―八―一

電話(〇三) 五九八―三三七六

FAX(〇三) 五九八―三三七八

印刷 開成出版株式会社

〒101-0052

東京都千代田区神田小川町

三―二六―一四

※無断転載、複製はご遠慮ください

資料寄贈の お願い

成瀬記念館では、学園史資料のご寄贈を
お願いしております。手放しても良いと思われる
資料がございましたら、ご一報ください。

- ・卒業アルバム 旧制日本女子大(全回生)
附属高等女学校(全回生)
新制日本女子大学(1950～1962)
附属高等学校(1948～1995)
附属中学校(1948～1954)
附属豊明小学校
附属豊明幼稚園
- ・本学関係の写真
- ・卒業証書
- ・校章、バッジ類
- ・記念品
- ・学生証、生徒手帳
- ・夏季寮のしおり、遠足・修学旅行等のしおり
- ・行事のプログラム(運動会・音楽会・入学式・卒業式等)
- ・実践倫理ノート
- ・講義にまつわるノートや制作物
- ・各種名簿
- ・自治活動にまつわる資料(学園祭・自治委員会等)
- ・制服
- ・学寮の記録、物品等
- ・附属機関の記録、物品等
- ・その他事務文書、物品等
- ・成瀬仁蔵関係資料

本学と関係のないものはお引き受けできませんが、迷われた場合はお気軽にご相談ください。

☎ 03-5981-3376

✉ kinenkan@atlas.jwu.ac.jp





日本女子大学
成瀬記念館